

湯島詣

泉鏡花

青空文庫

紅茶会

三両二分

通う神

紀の国屋

段階子

手鞠の友

湯帰り

描ける幻

朝参詣

言語道断

下かた

狂犬源兵衛

半札の円輔

犬張子

胸騒

鶯

白木の箱

灰神楽

星

紅茶会

一

「紅茶の御馳走だ、君、寄宿舎の中だから何にもない、砂糖は各
々適宜に入れることにしよう。さあ、神月。」

三人の紅茶を一個々々硝子杯に煎じ出した時、柳沢時一郎はそ
のすつきりと脊の高い、緊った制服の姿を籐の椅子の大きなのに、
無造作に落していった。

渠は腕袋かれカウスの美しい片かたひじ、かたひじを椅子の縁に掛けて、悠然とぶら下げ

ながら、

「篠塚しのづか、その砂糖をお客様に出して上げろ。」

「おい、」と心安げに答えたのは和尚おしょうあたま天窓で、背広を着た柔和

な仁体じんてい、篠塚某なにかしという哲學家。一脚の卓子テーブルを囲んで、柳沢と

差向いに同じ椅子に掛けていたが、体たいを捻ひねつて、背後うしろへ手を伸のばす

と雑書を納いれた本箱の上から、一瓶の角砂糖を取つて、これを二

人の間に居る一人にんの美少年の前に置いた。

「取つて頂くよ。」と優おとなしく会釈する、これが神月と呼ばれた客

で、名あざさを梓という同窓の文学士、いづれも歴々の人物である。

梓は柳沢が煎じてくれた紅茶の、薄うすべにいろ紅色の透すきとお取る硝子杯コップの

小さいのを取つて前に引いたが、いま一人哲学者と肩を並べて、手織の綿入こくらに小倉の袴はかまつむぎ、紬の羽織ひもを脱いだのを、紐長く椅子の背うしろ後に、裏かえを翻して引懸ひっかけて、片手を袴に入れて、肅然として読書する薄うすひげ髯のあるのを見て、

「何を読んでるんです、」と少しく腰を浮かして、差さ覗しのぞいて聞いた。

「僕、」と応じはしたけれども、急に顔を上げたので誰に返事をするのであるか、自分にも分らないで迂路うろ々々うろするのを柳沢は気軽に引取つて、

「若狭わかさが読んでるのは歴史だよ、国史専修の先生だもの、しばらくの間も研究を怠らない。」

「御勉強です、」といって神月が点首くと、和尚は、にやにやと

笑いながら、その読んでる書を横目で見た。柳沢は吹出して、

「真面目な挨拶をする奴があるものか、歴史は歴史だが大変な
もんです。無名氏著、岩見武勇伝だから可いじゃあないか。」

「酷く研究をしております、」と哲学者は仰いで飲む。これが聞
えたものらしい。若狭は読みながら莞爾とした。

「また何ぞの材料にならないとも限らないだろう。」と梓はその
硝子杯を手にした。

柳沢は斜に卓子に凭れて、小刀の柄で紅茶に和した角砂糖を
突きながら、

「そりやある、その材料のあることはちようど何だ、篠塚が小ま

さの浄瑠璃の中から哲理を発見するようなもんだ。」

「馬鹿をいえ。」

梓は傍かたわらより、

「しかし君も鳥屋むすめの女の言は、時に詩調を帯びると、そういった事があるよ。」

底意なき人達は三人一堂に笑った。

「賑にぎやかだね、柳沢、」と窓の下の園生そのうから声を懸けたものがある。

二

一番窓に近い柳沢は、乱暴に胸を反そらして振向いたが、硝子越がらすごし

に下を覗のぞいて見て、

「竜田たつたか。」

「誰か来ているかい。」

「根岸の新華族だ、入れ。」と云つて座に直る。

同時に、ひよいと窓の縁に手が懸かつた、飛附いて、その以前、器械体操で馴ならしたか、身の軽さ、肩を揺り上げて室の中に、まずその瀟しょう洒しゃなる顔を出したのは、竜田、名を若吉というのである。

梓を見て笑えみを含み、

「堪忍してやれ、神月はもう子爵じゃあない。」といいながら腕組をして外壁くつに附着くついたままで居る。柳沢は椅子をずらして、

「まあ入れ、ちようど可い。今その事に就いて、神月問題とい
のをはじめた処だ。ちよつとその休憩時間よ。神月が酷く弁論に
窮して、き様の来るのを待つていたんだぜ、竜田が居たらばツて
そういつてな。」

聞きも果てず、満面に活気を帯び来つた竜田は、翻然と躍込み、
二人の間へ衝と立つて、卓子に手を支いたが、解けかかる毛糸
の襟卷の端を背後へ撥ねて、

「可し、また例の筆法で苦しめたか、神月君、」
親しげに、

「よく、僕を待つてくれました、もう大丈夫だ、心配をしたも
うな。僕何のために学生となつて、法律を研究してると思う、皆

親友神月の弁護をするためだね、どうです。」

「どうぞ宜しく、」といって梓は戯れに頭を下げた。

竜田はその薩摩飛白の羽織の胸紐をぐツとメ《し》め、

「さあ、来い。」

「またやんちやんが始まるな、」と哲学者は両手で頤を支えて、
柔和な顔を仰向けながら、若吉を瞞めて剃立の髻の痕を撫で廻す。

「大概分ってるさ、問題というのは神月が子爵家を去って、かの夫人に別れて、谷中の寺に籠城して、そして情婦の処へ通うのを攻撃するんだろう。」

「勿論、」と簡単、がちやりと雑具の中へ小刀を投出して、柳沢

は おおまた 大跨たに開き直り、

「最初、神月がその夫人との中に感情を害したのは、不幸にも結婚の第一日、じつすなわち式を挙げた日だ。」

「さよう、」と突つ込こんで応ずる竜田の声は明快である。

「き様も知ってるな、僕も聞いた。そうして成程と思つたが、考えて見ると蓋けだし神月の方が非なんじゃあないか。」

「何、そんなことがあるものか、新婚旅行に出掛かけようとして、上野から汽車に乗込むと、まだ赤羽の声も掛からぬうち、山下の森の中で、光りものがした。神月は——おや、人魂ひとたまが飛ぶ、——と何心なくいつたんだ。谷中は近し、こりや感情だね。そうすると、あの鼻かかあ々あめ。」

「竜田たしな窘め、旦那様だんなさまの前じゃ、」と哲学者が戯れる。

顧みて、

「失敬。」

「結構、」といったのは、そのいわゆる旦那様梓であつた。竜田は勢いきおいよく、

「どうだ、小生意気ではないか、——いいえ、星が流れたんです、隕石いんせきでございます、——と云つた、そればかりならばまだしも怒じよすね。」

「神月が人魂だといったのを聞いた時、あいつあいきよう愛嬌あいきようのない、鼻たかの隆たかい、目の強きつい、源氏物語の精しょうりよう靈しんのような、玉たまつ司つかさ子こ爵夫人りゆう竜子りゆう、語を換えて云えば神月の鼻かかあ々あだ。君、そいつがねその権式高な、寂しい顔ひややに冷ひややかな笑えみを帯びてさ、文学士を軽蔑したもんだぜ、神月なるもの癩しやくに障らざるを得んじやあないか。」

「可よし、婿さんは癩いに障つたらう。癩いに障つたらうが、また夫人おごないその人の身になつて、その時には限らぬが、すべて神月の性質と、行いを見た時の夫人の失望を察せんけりや不可いかん。もつとも余り物質せい的はの名誉を重んずる夫人の性質も極端だが、それだけにまた儕せい輩はいに群を抜いて、上流の貴婦人に、師のごとく、姉のごとく、敬たつとい尊たつとばれている名誉を思え、七歳ななつの年紀としから仏蘭西フランスへ行つて先む

方の学校で育つたんだ。」

「待て、待て、少し待て。」と竜田は掌で卓子を押え、語を遮り、

「まあ待て、先方が七歳の時から仏蘭西で育つたんなら、手前どものは六歳の年紀から仲之町で育つたんです、もつとも唯今は数寄屋町に居りますがね。」

「竜田、」と留めた、梓は恥ずる色があつた。

「可いよ、君、可いから言わしておけ、どうせ皆御存じなんだ。」

どうです、彼が仏蘭西で、学び、日本で得た、すべての学識と、その子爵たる財産と、家屋と、庭園と、十幾人の奴隷とだ。その言一句といえども忽にせず、一挙手一投足といえども謹んで、二

十七歳の今日まで、旭あさひの昇るがごとくに博し得た名誉とを、悉しつぱ皆い神月に捧げて、その妻となつたのを、恩だというんなら、こ

つちにだつてその一切あたいに価するものがあるんだよ。」

哲学者は言ことばを挟み、

「見たまえ、また竜田が例の笛と鼓を持出すからな、はははははは。」

「何を失敬な、」と哲学者をちよつと睨にらんで、

「そうさ、持出すが悪いか。先方むこうじゃあ巴里パリイで、麵麩パンを食つてバ

イブルを読んでいた時に、こつちじゃあ、雪の朝、顫ふるえてるのを

戸外おもてへ突出されて、横笛けいこの稽古けいこをさせられたんだ。吹込い呼吸きが

強くなるためだといつて抱かかえぬし主しが、君、朝御飯も食いべさせない、

耐^{たま}るもんか、寒い処を、笛を習^{うち}つてる中に呼吸^{いき}が続かぬから気絶するのだが、毎朝のようだ、水を吹^ふかけて生返^{ふき}らして、それから握飯の針のようなのを二ツずつ貫^くつて食べる、帰ると三味線のお温^さ習^{らい}をして、そのまま下^{した}方の稽古^{かた}に遣^やられる。直ぐに踊の師匠に打^ぶちのめされるんだ。生疵^{なまきず}の絶間もない位、夜はというと座敷を廻り歩いちゃあ、年上の奴に突飛^つばされて、仰向けに倒れると見つともないといつて頬^ほ板^{ぺた}を打^ぶたれたもんだ、何のためだ、同じ我々同^{どう}胞^{ぼう}の中へ生れて来て、一方は髯^{ひげ}を生^{はや}して馬車に乗った奴に尊敬される、一方は客とさえいやあ馬の骨にまで、その笛をもつて、その踊をもつて、勤めるんです、この間^{かん}に処^{いた}して板^{いたばさ}挟^みとなつた、神月たるもの、宜^{よろ}しく彼を棄ててこれを救うべし

じやないか。どうだね、殊に親も兄弟も叔父叔母もない。ただ手足と、顔と、綾羅錦繡りょうらきんしゅうと、三味線と冷酒ひやさけと踊とのみあつて存する、あわれな孤児みなしごをどうするんです、ねえ君、そこは男子おとこの意地だ。」と若い人は意気すこぶ頗る昂あがつた。

柳沢は冷然として、

「あらず、そういう意地は、鳶とびの者も持つてるじやあないか。」

四

この折たから譬たとえば荒滝をずたずたに切つて落すような、がツがツひびきという響ひびきがした。この音は校舎の奥かたの方より遙はるかに轟とどろき来きたつて、

床下を決して戸外へ抜けたのである。

先刻さつきからわざと笑顔を装いながら、何か澄まないらしい色が見えて、ほとんど茫然ぼんやりしたかのごとく、柳沢と竜田の論ずる処を

聴いていた文学士は、太くいたこれを感じた様子で、

「何だね、今の音は、」と安からぬ状さまして尋ねた。

柳沢、そのあらぬ方かたを瞞みつめていて落着かない梓おもてみまもの面を瞻みまもつて、

「忘れたか、神月。」

「何を。」

「今の音を。室あたたを暖める蒸気じゃあないか。」

言う時、煉瓦造れんがづくりの高い寄宿舎の二階から一文字に懸けてある鉄くろがねの樋ひが鳴つて、深い溝を一団の湯気が白々と渦うずまあがり上つた。硝がらす

子窓まどは朦朧もうろうとして、夕暮の寒さが身に染みるほど室の煖まるのが感じらるる。

柳沢は片手を握って、長くこれを神月に差向けて卓子テイブルの上に置き、

「それだからもう寄宿舎に居た頃の事を君は忘れてしまったのだ。既に幾たびも君が学資に窮して、休学の已やむを得ざらんとするごとに、常に仏文フランスの手紙が添そつて、行届ゆきとどいた仕送しおくりがあつたではないか。神月、君が俊才有為の士である事は皆みんなが認めていた、けれども、いざとなつて金貨を積んでその業を助けたものは、天下に今の夫人を措おいて他ほかにやなからう。

そうすりや恩人でまた唯一の知己といわなければならぬ。夫

人の名誉のため、幸福のため、子爵のためというよりも、ただその知己であるというばかりに対しても、君の行はちと間違つてい
るじやあないか。」

梓は聞いて物をもいわず差俯向いたにも係らないで、竜田は
凜として姿を調べ、

「柳沢、そんなことをいって僕の居ない時に梓君を苛めるのか、
止せ。可いよ、待て、まあ、僕のいうことを、今君のいうごとく
んばだ。嗚々殿は仏文の手紙と、若干金の学資とをもって神月を
買ったものだと言わなけりやなりません、そいつあ御免を蒙りた
いな、仕送をしたつていくらがもんです。金子なら千か二千じや
あないか。利をつけて返すくらいさほど困難なことでもなし、ま

たそのくらいな^{あた}価で婿に買占められるような、僕の梓君じゃあない。それをともかくも言に^{ことば}応じて玉司家を^つ嗣いだのは、すなわち君のいう、その知遇に感じたからだ。

しかるに、のつけから人魂と流星の事で早くも神月の感情を^{そこ}害ねたのはどういう訳だい。

すべて女学校の教科書が貴婦人に化けたような訳で、まず情話^{のろけ}を聞かされると頭痛がして来るといやあ、生理上そういうことのあるう^{はず}筈はない、といった調子だから耐^{たま}った訳のもんじゃあない。かつお^{なかおち}中落^{うま}が旨くツて、比良目^{ひらめ}は縁側に限るといやあ、何ですか、そこに一番滋養分がありますか、と仰^{おっしや}有るだろう。衛生ずくめだから耐らない。やれ教育だ、それ睡眠時間だ、もう一分で

午砲だ、お昼飯だ。お飯だ。亭主が流行感冒一つ引いても、まっさきに伝染性なりや否やを医師に質すような婦を、貴婦人だつて、学者だつて、美人だつて、年増だつて、女房にしていられるもんか。」

五

「考えて見たまえな、名誉だの、品性だの、上流の婦人の亀鑑だのと、体の可い名は附けるものの、何がなし見得坊なんじゃあないか。」

御覧なさい、だから神月と結婚をした当座に、はじめからの関

係を知つて新聞が報道をすると、その記事の中に、何か夫人がかねて神月に恋をしていたというような意味が書いてあつたといつて、鼻々め恐しく憤つて、名誉を蹂躪された、世の中へ顔出しも出来ないでツたようなことを云つて、あたかも神月君が社をして書かしためたように当り散らしたというんだ。夫に愛しとるといふことをもつて、大なる恥辱と心得るような見得坊がまたあるかい、怪しからんじやあないか。」と声を鋭くして、竜田はその白面に紅を漲らしたのである。

これを聞いて聞き惚れて、

「しつかりやれく。」と哲学者も嬉しそうに応援した。

「それのみならず、数寄屋町と神月君とは神の引合せだと云つて

も可いな。……

第一それからして夫人と衝突する基じやあつたらうけれども、神月は先天的、むしろ家庭的か、そうだ、家庭的信心者で、寄宿舎に居る時分から、湯島の天神へ参詣をするのが例で、子爵家に行つてからも毎月欠かさなかつた。去年の夏だ、まだ朝早いのに湯島に参つて、これから鰐口を鳴らそうと思うので、御手洗で清めようとすると、番の小児が水銭をくれろと云つた。懐を探すと神月が懐中物を忘れたね、後に届けるといつても小児だから訳が分らぬ。内気な殿様だから顔を赧くしてまごまごしたツさ。そこへ来合せて水銭を達引いて、それが御縁となりましたのが、唯今の美人です。蝶さんなんだ。」

「解わかりましたよ。」といつて柳沢は詮せん方かたなげに苦笑した。

神月は極きまり悪わるげに、

「もう可よいじゃないか、皆みんな僕ぼくが悪わるいんだから、まあ、柳沢、竜田
」

「いいえ悪わるかないよ。僕は大賛成、一体婦人が男子に対して貢献するのに、自分の名誉だの、財産だの、芸術だのをもつてして、それで、算盤そろばん玉だまに当あたつて、差引さひきこうというほど生意気しやうぎなことは無い、いわんや、それに恩を被きせるに到いたつては、不届ふとどきといわざるを得ないな。」

しかるに蝶ちょうさんに至いたつては、その今いままで為なし来きたつたすべての、可よいかい。平へいツつたくこれをいえば苦勞くろうだ。その苦勞はほとんど天

下に大名たいめいをなしたものの、堅忍苦耐したくらいなもんだよ、その閱えつれき歴れきに対する報酬として、ただ、ひたすら、簡単に神月に見捨てられまいということ願つてまた他意なきを如何いかんよ。その上に一意専念、神月のために形造るに到つては、男子すべからくこれがために名と体とを与うべしき、下らない名誉だの、財産だの、徳義だのに、毛一筋も払うもんか。」

「しかし竜田、アダムとイヴあつて以来、世界に男女なんによただ二人ばかりではない。譬たとえば、神月とその美人と、」

「勿論、僕も居る、」

「それから俺おれよ、」

「私わしも居おるわい。」と哲学者は前に屈かがんで、顔を差向けていった。

「加うるに君が居ても差支えない。諸君のような人ばかりなら、
いくたり幾人居たつて私は心配も何なんにもしないが。」と梓は愁しゅうぜん然とし
 て差俯さしうつむ向く。

六

「だから神月、君自ら感情を制して、その美人と別れたら可よかろ
 う。」と柳沢は慎重に諭した。

「何、もう子爵家を去つて、寺に下宿したら可いいじやあないか。
 僕はね、爵位と、君があの高慢な鼻かかあ々々を棄てたというので、す
 べての罪を償あまりうて余あるもんだと思う。借金でも何でも遣やツつけ

ツちまえ。癩しやくに障さやつたら片かた端つぽしから弾はね飛とせ。一般の風潮で、日本に容いれられなかつたら、二人で海外に旅行するさ。それでもいけなけりや、天に登るこつた。美しい星が二つ出来るんです。天文学者には分らなくツても、情を解するものには、紫か、緑か、燦さん然ぜんとして衆星の中に異彩を放つのが明かに見出される。」と
 いい放つて、竜田はその若々しい、美しい顔を仰あ向むけて、腕組をした、毛糸の茶色の襟巻は端がほろほろと解けた。

その背を叩いて、

「江戸ツ児こ！ 相変らず暢のん気きなものだな、本人の神月は、君よりよつほど訳が分つてるよ。だから心配をするんじやあないか。」
 おおだだやかとと穩ゆにに云いいいななががらら柳や沢ざはは老ま実め々ま々めしく、卓てい子ぶの上うにに両りやう方かたかららつ

ないで下げた電燈の火屋ほやの結目むすびめを解いたが、堆うずたかい書籍しょじやくを片手で搔退かいのけると、水指みずさしを取つて、ひらりとその脊せきの高い体で、靴のまま卓子たけの上あがに上つて銅像どうざうのごとく突立つったつた。天井はそれよりも遙はるかに高いが、室は狭く、五人を入れて、卓子たけを真中まんなかに、本箱ほんばこを四壁よっぺに塞ふさいだ上に、戸かどの入口いりぐちには下駄箱くだばこが竝ならんで、これに、穿物はきものが脱はいであるなり、衣服きものは掛けてあり、外套がいとうは下さつてる。避よけて通らなければ出られないので、学士はその卓子越たけこの間道まじちを選えらんだので、余り臨機さそくな働はたらきであつたから、その心を解せず、三人は驚おどいて四方よっぺを囲こんで、斉ひとしく高く仰あぎ見た。ために国史専修こくしせんしゆの学まな士しも、しばらく岩見重太郎いわみしげたろうに別わかれなければならず余儀あまなくされた。

柳沢やなぎざわは突立つったつたまま、

「おい、ちよつと退かないか。」

「何をする、」と哲学者は呆れ顔をしてほとんど問題を研究する時のように難しく眉を顰めた。

事も無げに、

「紅茶を入替えよう、湯を取りに行くんだから、」

「こつちへ寄越せ、僕が行こう、」と哲学者も衝と立上る。

「そうか。」といいさま、柳沢はひらりと下りて、身軽に立直つた、ぱたりと靴の音。

電燈の球は卓子の上を這つたまま、朱を灌いだように颯と赫くなつて、ふツと消えたが、白く明るくなつたと思つたと、蒼い光を放つ！

「星を仰ぐこと、正に、」と竜田若吉は腰を落して頭を卓子の下に入れ、顔を上げて、清しい目を睜つて、

「こういう風。」

梓はその面羞気な顔を照らされるのを厭うがごとく、椅子を放れて疾く背後に退いた。柳沢は長い足を素直に伸ばして、膝に乗せて組違えると同時に仰向けに寝て一杯に肱を張つて、両手で項を抱きながら、じつと件の電燈を覗めた。

その時、国史専修の学士は、静に糸を取つて、無心に繋合せて、灯を宙に釣したと思うと、袴の下へ手を入れて、片手で赤本をおさえてみたが、そのまま腰を掛けて、また読みはじめ、岩見重太郎武勇伝。

三両二分

七

「歇やんだ、歇やんだ、可いい塩梅あんばいだ。」

空を仰いで立たちどま停どまったのは、町屋風の壮わかもの佼もので、雨の歇やんだの
 を見ると、畳たたみんで袂たもとの下に抱え込んでいた羽織はoriを一ひと揺ゆり、はらりと襟しぼりを扱しぼいて手を通した。この男が雨に当てまいと大切がるのは、
 単ただにこの羽織はoriばかりではなく、一ひと品しな懐なに入れてあるものがある。

大きな紙入ではない。乳ちち貫もらいの嬰あかんぼ児ごでもない。すなわち一足

表おもてうち打こまげたの駒下駄であるが、尾上おのえの使つかいに駈かけだ出して来た訳ではない。

これはさる筋の芸げいしや妓やから年玉に買つて頂いたので、すべて、お守まもり扱あつかいしにしているから、途中で雨を啖くらつたために、汚よごすまいと懐中した。本人は生白はだしい跣足である。

かかる人は、下町にまず松すしの鮎せがれの倅源次郎を措おいて外にはない。

それ世に、鳶とびの者の半纏はんてんは袂いなせにして旦那の紋もんつき着は高等である。しかるに源ちゃんりょうてんびんは両天りょうてん秤びん、女を張る時は半纏はんてんで、顛はちま

卷まき。宗匠を張る時は紋着で卷シガレット 莨ぼん、色と点取発句が一斉に出

来るのであるから、ついでこう下駄を懐に入れるような事にもなる。

かえつて説く源ちゃんは町中まちなかの暗くらがりに羽織を着込んだが、

足が汚れていたから下駄は穿はかないで、そのまま懐を揺り固めた。

「可い塩梅だ、畜生。」と、これも何か両面に意味の通ずるようなひとりごと独言をして、また足早に歩き出した。

その面形めんがたのごとく凹しゃくんだ面の、眉毛の薄い、低い鼻に世の中を何と睨にらんだ、ちよつと度のかかった目金めがねを懸かけている名代なだいの顔が、辻を曲つて、三軒目の焼芋屋の灯あかりに照てられた時、背後うしろから、錆さびたずんぐりした声で、

「源じゃあねえか、おい、源坊。」

「誰おもだい、」と思入おもいいれのある身振みぶりで、源次郎は振返る。

「俺だ。」

「や、」

「待ちねえ。」

つかつかと近ちかづいた、三尺帯を尻下りに結んで、両りよう提さげの蓑たばこ入いれをぶらりと、坊主天窓あたまの親仁おやしが一名。

「頭かしら。」

「おい、」と重く落着いて一ツ領うなすいた。これは下谷西黒門町に住したやんで、頭かしら、頭と立てらるる、辰何たつとか言うのである。本名は誰

も知らない、何をして暮すのか、ただ遊んで、どことも謂いわず一ひ

群とむれ一群入り込む侠きおいな壮わかもの俊しんに、時々木遣きやりを教えている。

頭かしらは膨らんだ源のその懐をじろりと見て、

「何だ、それは、」

「ええ、」

「下駄じゃあねえか、下駄じゃあねえか、串戯じょうだんじゃあねえ、

何を面談めんくらつたか知らねえが、そいつを懐ひまに入れるだけの隙ひまが有りや、敵あいての向脛むこうずねをかツぱらつて遁にげるゆとりはありそうなもんだぜ。何だい、出會でつくわしたなあ、犬か、人間か。」

「喧嘩けんかじゃあないんです。」

「辻斬つじぎりか。」

「冗談けんたんをいっちやあ可いけません。」

頭かしらはわざとらしく呵から々からと笑つて、

「じゃあ、どうしたんだ。」といったが、思ふう処つぎあるらしく、房ふつぎりしたその眉ひそを顰ひそめた。

八

源次は何の気も付かない様子で、

「仔細しさいはないんです、喧嘩けんかなんて何も決してそんな訳じゃあない
 ンだけれどね、」

「ふむ、」と心ある頭かしらは返事まで物々しい。ちと 応うけこたえ 答こたえを仰山
 にされたので、源次は急に極きまりが悪そう。

「降つて来たもんですから、その何なんですよ、泥でも芻はねあ上げち
 やあ、そのね、」と今更のように懐みまわをして、

「へへへへ、なに詰つまんねえ事なんで、」

「それが、」とその時、頭かしらはずつと合点のみこんだ顔をして、

「あれだな、評判の。ついまだ掛違いまして手前お目通めどおりは仕つかまつらねえが、源坊が下駄と来ちやあ当時名高なだけえもんだ。むむ、名高えもんだよ。」

「なに詰らない。」

「馬鹿あ言え。たたみざん置算ちざんより目の子算用を先に覚えようという今

時の芸妓げいしやに、若干なにがしか自腹を切らせたなあ、大したもんだ、どれちよつと見せねえ、よ、ちよつと拝ませねえかよ。」

思わず上から手で押えて、

かしら「頭、これですか。」

「その芸妓げいしやの達引たてひいたやつよ。」

「へ、何、下らないことを、」と内々恐悦で、少し含羞はにかむ。

「可いやな、見せねえ、見せねえ、一番御灯明を奉ることにしよ
うぜ、待ちねえよ。」

と言ひ懸けて向直り、左側の焼芋屋の店へ、正面を切つて揺い
で入る。この店は古いもので、取つきの行燈あんどうに、——おいしく
ば買ひに来て見よ川越かわごえの、と仮名書かながきして、本場〇焼俵藤助
——となん。

「父爺とつさんや、」で頭かしらは無造作ことばに言を懸ける。

ぶつぶつ、……ものを読んでいた声はたと止やんで、破行燈やれあんどう
の灯の射さす土間の上の一枚の古障子を明けて、

「誰たれだい。」といった藤兵衛とうべえは、匍はらんばい匍はらんばいになつて、胸の下に京
伝よみほんの読本よみほんが一冊、悠々と真鍮環しんちゆうわの目金を取つて、読み懸けた

本の上に置きながら、頬杖ほおづえを突いたままで、皺面しわづらをぬつ！

「俺だよ、へんちつとも珍しくねえ。」

「おお、頭。」

「用じゃあねえんだ。とっさん少しばかり店を貸してくんねえ、灯あかりが欲しいでの。」

「何か、灯ツて、その燻くすぶり返つた釣洋燈つりランプのことかい。」

「そうよ。まあ、」

「御念にやあ及ばねえこツた、内証ないしよの文ふみでも読むか、」

「いんや、質札だ、構わつしやるな。寒いから閉めてくんな。」

戸外おもてに向つて、

「源坊、こつちへ入らつし。おい、何を茫然ぼんやり石地蔵を抱いた風

で突立つ立たつてるんだ、いじけるない。」

「頭あたま、暖あたんなさい、」と竈へつの後つから皺しわ噎がれた声を懸ける。

「おお、入れ黒子ぼくろのしなびたの、この節あどんな寸法、いや、寸す伯んぼくか寸伯すぼくか、ははは。」

「串じょうだん 戯あそじゃあない、ちようど一くべ燻くべた処あつただ、暖あつたけえよ。」

「豪儀ごうぎだな、そいつあ、」とくるりと廻まつた、頭かしらの法然ほうねん天窓あたまは竈かまどの陰かげに赫てかてか々々して、

「よ、まあこつちへ来きねえ、松まつの鮓すしの兄哥あにい、入れいッてことよ。」
強つよいられて、源げんさん止やむことを得えず。

「御免ごめんなさい。」

「さあさあ、」と婆ばあさんも七十しちじゅうばかりだが如才ごとない。

九

「聞きねえ、婆さん、御前おまえなんざあ上草履で廊下をばたばたの方
だったから、情人いろを達引たてひくのに、どうだ、こういうものは気が付
くめえ。豪儀なもんだぜ、こら、どうだ素晴らしいもんじゃあねえ
か。」

頭かしらは籐とう表おもてを打った、繻珍しゅちんの鼻緒で、桐の杵まさという、源次
が私生児を引放ひっぱなして、片足打返して差出した。

「ねえ、こら。」と引ひっくり返して鼻緒を掴つかんでちよつと捻ひねる。

「どうしたんだね、」と婆さんは膝に手を乗せて蹲うずくまったまま呆

れて見ている。

かしら おおげさ
頭は大袈裟に、

「どうしたどころかい、近頃評判なもんだ。これで五丁町を踏ふみな鳴すんだぜ、お前も知ってるだろう、一昨年おととしの仁和加にわかに狒々退ひひ治の武者修行をした大坂家の抱妓かかえな。」

「蝶吉さんかね。」

「うむ、この節あ数寄屋町に居らあ、あの跳はねツ返りめ、お先走りで、何でも来いだから、仁和加の時も、一本引ツこ抜いて使うんだからツて、それ痛い目に逢わないだけにして、本式に習いたいというので、お前しなンとこの藤さんに仕込んでもらったな。」

面小手しなで竹刀ひっかつを引担ひっかついでお前、稽古着まに、小倉まの襠ちだ高かか何

かで、朴ほおの木齒ひきずを引摺ひきずつて、ここの内へ通つちや、引けると仲之町を縦横十文字に鳴ならして歩いた。ここにおわします色男も鳴すことその通り。

それがだな。あのお茶ちやつびいめ、ついこないだまで竹馬に乗ったり、学校の生徒ひつばに引張り出されちやあ田圃たんぼでぶらんこをしていたつげが、どうだい、一番この男とおつこちやあがつて、それ、お歳としだま玉なに内証ないしよだよ、と遣やりやあがつたんだとよ。驚くじやあねえか、この下駄だ。」といつて、また引ひつくり返した。頭かしらは竈くわの前ついでに両足を拵ぎんぎせるげながら、片手で抜取くわつて銀煙管くわを銜くわえ、腰なる両り提ようさげ くらふらと蓑たばこを捻くる。

「おや、」といったきり、婆さんはかねてその蝶吉というのを知

つてるほど、おつこちたと謂いわるる男、すなわちこれなる源次郎のせめてそれだけでも止よして頂よきたい、目金を乗せた鼻の形と、
 件くだんの下駄と交かわる交かわる見競みくらべて解げせない顔附。

頭かしらは悠然と煙を吹ふかして、

「何しろ素晴らしいもんじやあねえか、可恐おそろしい。幾らだとか言つたつけな、んんどうだろう、うむ、豪儀な。」

言いようが余り業ぎようぎよう々しいので、取合あう気もなかつた婆さんも近々と目を寄せて、

「頭、こりや今の流行はやりかい。」と老いたる事をまじまじと言う。

これを聞くと叱なるがごとく、

「これ庫くらの七戸ななとまゑ前も嘗なめた口で、何だい、その言い種ぐさは、こ

源坊、若い中うちだぜ、年紀としは取るもんじやあねえの。ここに居る婆さんは、これでも仲じやあ葛くずの葉といつてその昔は売つたもんだ、ずうつとそれ、」

「止よしねえな、見つともない、」と穩おだやかほほえに微笑んで目を外そらした、もう仏に近いのである。

「旧もとの直ねで二朱ぐらいか、源坊、幾らだとかいったつけな、二両二分。」

「頭、三円、」といつて件くだんの鼻を仰向あおむけにして澄すます。

「ああ、三両二分か、何でも二分という端はしただけは付いてると聞いたよ。そうか、三両二分か。ふ、豪儀なもんだ、ちよつとした碁盤より直ねが張つてら。格子戸で、二間なら一月分の店賃たなちんだ、可お

恐そろしい、豪傑な。」と熟つくづく々見ながら、うっかりしたか、下駄の
 肚はらで吸殻をとん。

源あわただ次慌しく、

「頭、」

「ほい、これは。」

十

「しかしどうも可恐おそろしい気前きぜんだぜ。もつともあの蝶吉てつきちといやあ、
 いつかも客きやくに連れられて中の植半うえはんへ行つた時、お前、旦那だんながず
 ツしり重量おもみのある紙入しりいりをこれ見よがしに預けるとな、肯きかない気

だから、こんな面倒臭いものは打棄うっちゃちまうよ。まさかと思うから、うむ、可いいとも大川へ流しツちまえ、といったが災難、仲なかみせ店で買物をして、お前紙入は、というと、橋の上から打棄うつたと言わあ。本当か、とばかりで真蒼まっさおになつたとよ。そうだろう、二百円足らず入いッてたんだそうさ。

それだものこのくらいな達引たてひきはしかねめえ。」という、高がこな下駄を（しかねめえ。）というほどの事はあるまいと思おうほど、頭かしらが為振しぶりを見て、婆おばさんはこの年紀としになつてもその瞼まぶたの黒い目に、逸いちはや疾しく仔細しさいがあろうと見て取とつた。

源次も何となく気がさして、少し不安心になつた、引ひき構がまえで、
「頭かしら、もう沢山だ。」

きはらずか
 気可愧しそうに装つて、もじつきながら、出して取ろうとした
 手を、外して持更え、
もちか

「遠慮をするなツて事よ、何もはにかもうツて年とし紀じやあねえ。
はなしか
 落語家の言種いいぐさじやあねえが、なぜかえり帰宅が遅いんだツて言われり
 やあ、奴が留めますもんですから、なんてツたような度胸がある
 んじやあねえか。」

「なにまた詰つまらないことを、」

「それではなくツて、どうしてお前、これが長火鉢の上へ持出され
 るもんか、この間もお前、脱いだやつを持って上あがつて、伝が家の
 帳場格子の中へ突つっこ込んで見せたというぜ。」と風見かざみの鴉からすがくるり
 と廻まわつて、少し北風ならいが吹いて来る。

「え。」

「その時ぶん撲なぐられなかつたのが目つけもんだ。」とずツきり言つて、したたかに氣を替える。

ひやりと応こたえて、

「何だつてね、」

「婆さん、もう一ひとつ燻ほ※とやりやどうだ。」

といいなから突込つっこむように煙管きせるを納いれた、仕事かかに懸かる身構みがまえで、

頭かしらは素知らぬ顔をして嘯うそぶきながら、揃あえて下駄かいたかを搔か拵つめり。

形勢おだやか穩ならず、源次は遁にげ足を踏あみ、這身はいみになつて、搔裂かきさくよ

うな手つきで、ちよいと出し、ちよいと引き、取戻かえそうとしては

遣やり損そこない、目色めいろを変えて、

「頭かしら、何ですから、急ぎますから、」

「跣足はだしで駈出しかけだねえ、跣足で。それが可いいや、可恐おそろしく路が悪い

ぜ。」

また一ひとあて 当たあてられて揉手もみでをして、

「穿はいて行ゆきますよ、よ、穿はくんだから、頭失礼ですが、その。」

「穿はかねえでさ、下駄は穿はくに極きまったもんだ。誰がまあ頂うく奴やつが

あるもんか。だが、それ懐なつへ入れる奴やつは無なえとも限かぎらねえ、なあ、

源坊。」

「私わつしやちつと何なにだから、これから少し急いそぐんですから、」

「どこへ急いそぐんだ。どこへ、」

「ええ、ちつとその、何なにで。これから発句はつくの会かいがあるんです。」

と捨鞭すてむちで歌を読むような見得をいった。

「発句の会、ああ、そうか。源、何、何とか云つたな、その戒かいみ名よう、いや俳名よ。待ちねえ、お前なんざあ俳名よりその戒名の方をつけるが可いぜ、おいらが一番下駄の火葬やというのを遣つて、先きへ引導を渡してやろう。」

「ひゃあ、」

「馬鹿め、跣足で失せやあがれ。」

通う神

十一

「おやおや、酷ひどく曇ひどってるなあ、何だかこれじゃあ君を送つて来たようだが、神月君。」

竜田は校内の園そのを抜けて、弥生町やよいちようの門を出ようとして空を見たのである。

「一所に散歩をしようと思つたけれど、降りそうだから僕はもう失敬するよ、それじゃあ君、議論は議論だが実際は実際だ、よく考えて軽かるはずみ忽はずみなことをしたもうな。」と年下の友に熟々つくづく言われて、ただ打うちうなず領なずくのは神月であつた。

「それでは。」

「失敬。」と言ひ棄てて、竜田は門から引返した。暗がりの中を詩を唱つたが、低唱してやがて聞えなくなつた。

梓はていかい 徊して歩を転ずる、向むこうから来て、ぱったり。

「えッ。」といつて何物か身を開いて退しよつて神月の姿を透すかし、
「よ、先生か。」と冷評ひやかすような調子で言つた。

これは松の鮓すしの源次郎で、蝶吉から頂いた、土付かずといつて可いい大事の駒下駄を、芋を焼く竈へつに焚つくられた上に、けんつくを啖くらつて面目を失つたが、本人に聞くより一段情無い愛想あいそ尽づかしを、頭かしらの口から、しかも意見するごとく言い聞かされ、お穿物はきものといふ謎まで聞いて、色男堪忍ならず。胸はひツくり返るようだが、むずと胸むな倉くらを取られると、目の玉が出そうな豪傑かしらの頭あいてを対手に

は文句も言われず、居耐いたたまらなくなった処を、煙けぶりに燻いぶされて泥に酔かつたように駈出かして来たのである、が、自分から顛倒てんとうしていて突当つつた人を見ると、蛇じやの道は蛇へびで、追廻おす蝶吉てつきちがまた追廻おす探索は届といて、顔かまで見知越みしりこの恋この仇あだ。恋こに上下の差別さべつがないから仇あだに上下の差別さべつはない、学士神月梓しんげいである。むかッ腹立はらたちの八ツ当やりで、

「ふん、色男いろおとこも凄すじいや、汝うぬが孕はらませた児こを墮おされりや沢山さわじやあないか、お政府かみへ知しれて見ろ、二人とも、泥かじを嚙かるんだい。知しつてていわないのはお慈悲あまのりだと思おもうが可よい。こつちから突当つつたらな、そつちからあやまつて、通とるこつた。人ひとをつけ、学者がくしやもそれそれで沢山さわだ、色男いろおとこ万歳ばんざいだな。」

と影の添うがごとく七八歩、学士に添つて逆戻りをして歩いたが、

「ざまあ見ろ色男、面が見てえや、青いのか、赤いのか、やい、七面鳥の文学士。」と悪たれ口を吐き棄てて擦違つて駈出した。学士は歩み悩んだ様子で、ふと足を留めたがさすがに後を見も返らず、取るにも足りない下司の雑言と思つたから。

「雨か。」

空を見ると雲低く、ひやりとして頬に雫、またばらばらと二ツ三ツ。

「ああ、」と呟いて、あたかもこの雫に懸るまいとするごとく、かなたこなた身を交して歩いた。

最初はただ、ひさしみぞ 廂溝などを幽かすかに打つ音のみであつたが、やがて、瓦屋根かわらやねに当つてまたばらばら。

「厭いやだな。」

見る見る繁はげしくなつて、颯さつと鳴り、また途絶え、颯と鳴り、また途絶え途絶えしている内に、一斉に木の葉こに灌そそぐと見えて静しずかな空は一面に雨の音。

神月は見えなくなつた。

紀の国屋

十二

おんまちあいうたまくら
 御待合歌枕。磨硝子の瓦斯燈で臙の半身、背に御神燈
すりがらす がすと うおぼろ
あかりの明を受けて、道行合羽の色くつきりと鮮明に、格子戸の外
みちゆきがっぱ
 へずつと出ると突然柳の樹の下で、新しい紺蛇の目の傘を、肩
いきなり
 を窄めて両手で開く。顔はその中に隠れて見えず、丈の好いすら
すぼ
 りとした瘦ぎすな立姿。桃色縮緬の扱帯で、弱腰を固くし
やせ
 めている。白足袋で、黒の爪皮を深く掛けた小さく高い足駄
つまかわ
 穿で、花崗石の上を小刻の音、からからと二足三足。頭が
き
こきぎのみ
あしだば
つむり

軒の下を放れたと思うと、腰を伸して、打仰いで空を見た。
 ここに引着けた腕車が一台。蹴込に腰を掛けて待つていた車夫、

我が主来れりと見て、立直り、急いで美しい母衣を刎ねる。楫
 棒に掛けて地に置いた巳之屋と書いた看板は、新しい光を立て
 て、蠟紙を透す骨も一ツ一ツ綺麗である。

「おや、降つちやあいなんだね。」静に蛇の目を窄めて片手に
 提げた。鼻筋の通つた細面の凜とした、品の良い横顔がちら
 りと見えたが、浮上るように身も軽く、引緊つた裾捌で楫
 棒を越そうとする。

「こちらへ、」といった車夫は小腰を屈めて、紺蛇の目を手早く
 受取る。その腕車に乗ろうとする時、かちかちかちと木を拍つて、
 柳の彼方の黒塀の前に、頬冠をした二人が在った。

「へい、御鬘貞を一両名、尾上菊五郎、沢村源之助。」ト声を懸

けたので、腕車の蔭に立停たちどまる。

その時、板塀の上なる二階の障子へ、明るく影が映つたが、端を開けて、廊下へ出た。植込こざえの梢こずえがくれに、

「あいよ、」という声、捻ひねつた紙包が宙を切つて、忍しのびがえし返の釘を掠かすめてはたと二人の前に落ちる。

「ええ、鼠ねずみこもん小紋はるぎのしん春着がた新形。神田の与吉よきち実は鼠小僧じろきち次郎吉、傾城けいせい松山、」ちよつと句切つて、

「鎌倉山の大小名、和田北ほうじょう条ちゆうをはじめとして、佐々木、梶かじわ原ら、千葉、三浦、当時いちろう一いちろう、藹別当いっぺいの工藤などへは二三度へえ入り、

まぶな時にやあ千と二千、少ねえ時でも百や二百、仕事をしねえ事あなかつた。その替りにやあ貧乏と、その名の高え曾我などじ

やあ、盗んだ金を置いて来た、悪事はするが義理堅え、いわば野暮な盗人だが、知らねえ先あともかくも、こういう身性と聞いたらば、お主やあ厭になりやしねえか。」

「何で厭になるものかね、これもみんなその身の好々々、お嬢さんといわれるのが、ちいさい時から私や嫌い、油で固めた高鬚より、つぶし島田に結いたい願ひ、御殿模様の文字入より、二の字繋ぎのどてらが着たく、御新造さんや奥さんと、いわれるよりも内の奴、内の人かといいたさに、親をば捨てて勘当うけ、お前の女房になつた私、どんな事があるうとも、何で愛想が尽きやうぞいな。」

菊「そんならおぬしやあ盗人と、知つてもやつぱり愛想も尽さず

、
 「源「お前と一所に居たいのは、譬にもいう似た者夫婦、」菊
 「夜盗を働く鬼の女房にようぼに、」源「枕探しの鬼神きしんとやら、」菊
 「そういうお主が度胸なら、明日あすが日ばれて縄目にあい、」源
 「お上のお仕置受ければとて、」菊「隙行駒ひまぐの二人連づれ、」源「二
 本の槍やりの二世にせかけて、」菊「離れぬ中の紙かみのぼり 幟、」源「果はては野
 末に、」菊「身は捨札、」源「思えば果敢はかない、」
 「紀之国屋」と思いがけず、暗がりの露地うしろの後の方で、うら若い
 清すずしい声。

「ほほほほほほ、」と蓮葉はすはに仇気あどけなく笑つたが、再び、

「紀之国屋！」とあてもなく漫ろそぞに気の冴えた高調子。酔つたと

見えて、ふらふらして 仮色こわいろづかい使かいの背後うしろに立つて、

「嬉しいねえ、」

といいながら、無遠慮に一ツその一人の肩を叩く。吃驚びっくりして

黙つて呆れる、女は罪もなくまた笑つた。

「ほほほほほ。」

「おや！ お蝶さんだ。」と二階の欄干てすりに凭懸よりかかつたのが、思わ

ず威勢よく声を立てた。

振仰いで、

「今晚は。」

「神月さん参りました、来たんですよ。」と言ったが障子の中に姿が消えた。

「へい難ありがと有う様でございます。」

度胆どきもを抜かれて、茫然ほんやりした仮色使は、慌てて見当を失ったか、かえつて背後うしろに立ったのに礼をいって、

「さあ、」

「おい。」

踵くびすめぐを廻らすのを見も返らず、女は身を斜ななめにまた蹠跟よろろけて、柳の下を抜けようとした。

門口かどぐちで、

「蝶ちゃん、」

「はい、」

「お気を付けなさいよ。」

「ちやんかい。」

「おたのし楽みだね。」

とひらりと乗る途端に楫かじ棒ぼうを取った、腕車くるまの上から、

「さようなら。」

「チャチャチャツキチツチドンドン。」軽く柳の枝の垂れた尖さきを細く指で叩いて見せる。

「ふん、」とばかり腕車の上で。見ぬようにしてちよつと見ながら面おもてを背ける、途端に車夫は曳ひき廻めぐらした。暗夜の小路を看板は、これ流星のごとくに去んぬ。

「チャチャチャツチキツチ、」と低く口吟みながら、格子戸をがらりと開けると、同時にかまち框の障子を開いて、

「よくねえ、」と声を懸けて、逸いちはや早く今欄干に立たちあらわ顕れたそ

の女中が出迎えた。帳場の灯あかりと御神燈の影で、ここに美しく照らし出されたのは、下谷したや数寄屋町大和屋が分やまとや わけの蝶吉である。

着つけは濃いお納戸地に、金で乱菊を織出したしゅちん縹くろじゆ珍と黒縹

子の打合せの帯、滝たきしま縞のお召縮緬めしに勝かちいろ色のかわり裏、同じ

裾すそを二枚襲かさねて、もみじに御所車の模様ある友染ゆうぜんに、緋裏ひうらを取

った対丈襦袢ついたけじゆばん、これに、黒地に桔梗ききようの花を、白で抜いた半

襟なり。

洗あらいがみ髪つぶしの潰島田つぶしまだ、ばっさりしてややほつれたのに横櫛よこぐしで、

金脚きんあし五分珠ごふだまの簪かんざしをわずかに見ゆるまで挿込んだ、目の涼しい、眉まゆの間に雲くもりのない、年とし紀はまだ若いのに、白粉おしろい気なしの口紅くちびるばかり、小肥こぶとりして瘦やせてはおらぬが、幼い時から、踊おどが自慢じまんの姿である。

出迎いそえた女中にようぢゆうは前まへへ転のめつたと思おもつて慌あわただしく身みを開ひらいて、

「あれ危あやいじやありませんか、」

蝶吉つまさずは躓つまずくように駒下駄こまげだを脱ぬいで、俯うつむ向けに蹠よろ蹠よろけ込んで、障しょう子こに打撞ぶつかろうとして、肩かたを交かわし、退すきつて、電燈でんとうを仰あいで、踏ふみしめて立たつた。ほツという酒さけの息いき、威勢いせいよく笑わらつて、

「今晚こんばんは。」

段階子

十四

「蝶さん、奢おごらせませすよ。」と帳場から呼んだのは女房である。

この待合はその座敷、その器物、その取とり扱あつかい、何につけても結構なものではない。五人一座の二人までは敷かせる座蒲団ざぶとんの模様が違つて、違つた小紋こもんも、唐草も、いずれ勧工場かんこうばものにあらざるなく、杯洗はいせんと海苔のりとお銚子ちようしが乗つて出るのも、牛屋ぎゆうやのちやぶ台の真中まんなかへ丸く木を填うめてあろうという組織であるのに、

お座料がまた必ずしもお安くない。これでは何の取得とりえもないが、ここに注意すべきは女房たるもの、兄とその情人いろのごときもの、且つ女中に至るまで、よく注意して秘密を守り遂げる信用があるので、知れては身分に係わるといった側が、ちよいちよい懐手ではいりで出入する。

あえてものの三角形が秘密を守るものだという数学の原理はな
いけれども、歌枕の女房は目の形が三角である。鼻が三角で、口
が三角、眉を払った痕あとがまた三角なりで、頤おとがいの細った頬骨の出た
三角を逆さかさまにして顔の輪廓りんかくの中に度を揃えて竝ならんでいる。白ツぽ
い糸織の羽織の裙すそを払って、金の平打ひらうちの指環ゆびわを嵌はめた手を長火
鉢の縁から放し、座蒲団を外してふわりと立つと、むツくりと起

きた飼犬が一頭。

真しんちゆう 鑰ゆうの首環をがちやがちやと鳴らして、さらさらと畳を渡り、蝶吉の裾すそを掠かすめて、取と着つきの階はしご子だん段へ、矢のごとく駈かけ上あがった。

この犬、一挙一動よく主婦の意こころを知る、今その座を立ったのを見ててつきり二階へ上あがるのだと目敏めごとく先へ立つて飛出したのであるが、段を六ツばかり駈上ると、振返ためらつて待っている風情。

三角の主婦は悠々として、

「さあ、お二階へ。」

「お早くいらつしやいな、」と傍そばからまた女中が促した。

蝶吉は雨の朝あさぎくら桜の色しつとりとして、まぶた瞼に色を染めながら、

「厭いやですよ、」とすねるように言つて肩を振つた。

「可いいのかい、ちよいとそんなことを言つて、」

「どうせね、」と主従が澄すまして莞爾にっこりして左右から顔を覗のぞくと、

「犬こわが恐いのよ。」と段階子を見込んで笑う。

主婦はつかつかと前に出て、目をきよろつかして伺つてる飼犬を見上げながら、左の手を袖の中へ引込ませて、ちよいと出して、指をさすと電気エレキを感じたようにくるりと廻つて、小犬はちよろちよろと駈かけ上る。

「可いけない！」

というが疾はやいか、段に片足を上げて両手を支つく、裾を引いて、

ぼつたり俯向うつむけに転のめった綺麗な体は、結ゆわえつけられたように階子に寝た。

「危い。」

「あれ、」とけたたましく諸声もろごえに叫ぶのを耳にも入れず、蝶吉はそのまま腕かいなを伸のびして、

「不可いけません、不可いけない、不可いけないよ、」と蹠よろ踉ろける足を引摺ひきずつて、
「畜生わたい、私より先へ行くツて法があるかい。」

「おいで。」

と膝を軽く拍うつて、振返つたのは梓である。

上あがりぐち 口の処ところで、くるくる廻まわつていた飼犬は、呼ばれて猶ためら予らわ
ず衝つと飛込み、いきなり梓たもとの袂たもとに前足を掛けて、ひよいとその膝

に乗って畏かしこまつた。

「不可いッたら！ あれ。」

十五

「失敬な奴ぢや、てツたような訳だわね、不都合だよ、いけすかない、何だ手前は、」ふらふらするのを踏ふみこたえて、

「誰に断つたの、畜生、こつちへ来ないかい、打ぶつてやるから、」と袖を翻して、手を挙げたが、そのまま立つてるさえ物憂げであつた。

「誰が打たれに、……」

梓は俯向うつむいて、犬の天窓あたまをこれ見よがし。

「厭いやよ、厭いやよ、私は厭いやですよ。そんなもの、打つちやらかしておしまいなさいなねえ。」

「恐こわいな、どこかの姐ねえさんが、打つちやらかしておしまいなさいなねえッて言ってるよ。」

「焦じれツたいねえ。」

梓は笑いながら犬の前足を取って伸のばすと、飼犬は口を開けて、目を光らして、わッ!

「悔くしがってるじゃあないか、」と横顔を見せて振向いた。

「なぜそうですよ、言うことをお聞きなさいなね、ええ焦これつた
い、」

地踏じだんだを踏んでも澄すまして取合ないので、

「悔しい。」

と横を向いて上口の壁を、構いつけず平手でどんどんと撲なぐり付けて体を揉もむ。酔ってる処へ激しく動いたので、がつくり膝かひむしが抜けて崩折くずおれようとして、わずかにこらへ、搔か撈むるように壁かべに手を縋すがつて、顔を隠して吻ほっという息を吐ついた。

「どうしたんですよ、」

階子段あがを上り上り、主婦おかみは物音を怪あやしんで来たのである。

「おや、おや、」

「言句もんくばかり言ってるさ、構わないでおくが可いい。なあに汝おまえが先へ来たって何も仔細しさいはなكارうじやないか。」

「そのことなんですか、まあ、飛んだ難かしいこと、トン！」
わツと吠ほえて前足を立てた、トンは飼犬の名であろう。

「おいで、おいで。さあ、」

「可いよ、おかみさんこつちへ。」

「でもまた奥様がその何ですから、おほほほほ、」と主婦おかみは三角の口を丸うして笑つて控える。

「何を、詰つまらない。」

「はい、はい。」

膝に手を垂れ、腰を屈かがめて、戯たわむれに会釈すると、トンはよくその心を得て、前足を下して尻尾を落した。扁ひらたい犬の鼻と、主婦おかみの低い鼻は、畳を隔てて真直まっすぐに向い合つた。

「しよのないあか嬰兒ちゃんだよ。」

十六

「どうにかしてやっておくれ、面倒だから。」

梓は膝からトンを搔退かひのけて、座も言葉も更あらためて言った。

「さあ、あなた、」とこれもちやんと極きまつて背せなに手を掛けると、
訳もなく振払って、

「厭いやです。」

「拗すねるもんじゃありません、あの方が来ていらつしやるのに、
何が気に入らないで、じれてるんですよ、母おっかあ様は知らないよ。」

と行って一つ打つ。

「痛いよ、」

「嘘ばツかり、」

「厭よ。」

「何が厭なんですツてば、よ、焦れツたい人だ。ええ、」

蝶吉は身顫して、

「姐さん、」

「才ちゃんは疾とつくに帰りました、居やあしませんよ。さあ、さあ、

もう聞かなきやこうして、」

「あれ。」

蝶吉が身悶みもだえするのを、主婦おかみは構わずくすぐ擦すったが、吃驚びっくりして肩

を抱いた。

「おや、本当に旦那、本当に泣いてるんでございますよ。堪忍して下さい、堪忍して下さい、悪かったよ、どうもお前さんただもう嬉しがってるんだろうと思うもんだから、つい知らないで、飛んだことをしたよ。済まなかった、」

極めて後悔し、そのまま首を伸のばして、肩からに搦からんで顔を覗のぞくと、真赤まっかになり、可愛かわゆい目を細くして、およそ耐たまらないといった様子で、麗あでやか艶ほほえに微笑ほほえんで、

「嬉しい！」とばかりで斜ななめに顔を向けて、主婦おかみの面おもてと、神月の横顔ながしめを流ながしめ眇ななめに見ながら蝶吉つっこりは莞爾にっこりする。

「畜生。」

小さくなつて、

「擦りツこなしよ、私はもう擦られると死ぬんですから、酷いわ、一番恐いことよ。」といいながら澄して壁を離れ、裾を払つて立直る処を、両手で背後から突飛ばした。

「可憎しいツたらないんだもの。」

壁には薄り、呼吸の痕と、濡れた唇が幻にそのまま残つて、蝶吉の体は源之助の肖像画が拔出したようになって、主婦の手で座敷の真中へ突入れられて、足も溜らず、横僵れになつたが、男の傍。

あたかも好し、梓の膝を枕にして、片手を逆に支いて起上ろうとしたが、支えかねて半面を隠して倒れた。件の御所車を染めた

友染の長襦袢ながじゆばんは、かわり裏のしどけない、裳もすそをこぼれて媚なまめかしい。

男は懐にした手を出しもやらず、眉ひそを顰ひそめて、

「何だね、その形なりは。」

「可よくツてよ。」

「可いかあない、かみさんが見ているよ。」

「可いいのよ、ねえ、おかみさん、」

「どうですか。」と極めて慎重に答えた。主婦おかみは心なく飛込むも

異なるものなり、そのまま階子段へ引退ひっさがるも業腹ごうはらなりで、おめ

おめと見せられる。

「不可いけないッたッてしかたがない。」

とその玉のごとき手を畳に、はったり。

「私わたいはもう草くたび臥びれたんです。」

「重いい、しきょうがおないな、おいい、ちやんとおしよ、」と揺ゆり落おす勢いきおいで、梓しづは邪よこしま険けんに肩かたを振ふった。

十七

「あら、髪かみがこわこれてよ、」と少すこし横よこにななって、蝶てつ吉きちは片ひら手てを上あげて仰あおむ向けむけに梓しづの胸むねを押おえて、恍うっ惚として嬉うれしそうに、

「鬢びんのほつれは枕まくらの咎とがよ——あれき、じつとしてしいらつしやい。

後のち生うだから、」

「構うもんか、怪しからん。」と男はわざと叱るように言つて、振落そうとする。

蝶吉は目を瞑つて、口をしめ、眉を顰めて、さも切なげに装つた、

「頭痛がしてよ、頭痛が、天窓が痛いのに、酷いことねえ。」

「嘘を吐け、」

「あなた撥つておやんなさいまし、」と主婦は焦れつたそうに足踏をした。

黙つて主婦を見たが、神月は下を向いて、

「止そう、見ツともないから、撥ると最後、きやつきやついつてその騒々しいといったらないもの。」

「おや、いつも撥るんだと見えますね、あなたは。」

「え、何、下らない、何を言ってるんだ。まあ、おかみさん、飲むさ、こつちへ来て。」神月はこれをキツカケに片^{かたひじ}肱をちやぶ台に支いて、やや所在を得たのである、しかたのなかつた懐中の手は、猪口^{ちよく}を取つて、ちよつと上げて、

「飲むさ。」

「いえ、頂きますまい、そんなことでごまかそうたつて駄目ですよ。まあ、串^{じょうだん}戯は止して早く^{こしら}拵えさせますから、寝かしてお上げなさい、本当に酔ってるんですよ、全く苦しそうだわ。」

おかみ 主婦は一切呑み込んだ顔附であつた。神月はそれとはなげに、
「直ぐ帰るんだから、何だよ。」

「ですから誰もあなたにお休みなさいとは申しません。」

と悪く切口上で、別にお爛かんを見ようともせず、上あがりぐち口に先刻さつき

から立つていたままで、二階を下りようとする、途端にちやぶ台の片隅つくばに蹲つつて、洋燈ランプの影で見えなかつたトンは、むツくりと跳はねおねお起きて首輪の音をさして座敷からツツと出た。

「どこでそんなに酔わされたんだ、よ。」

神月は期せずして主婦おかみを下に去らしめた件の猪口くだんを棄てて、手をその小さな女の胸に置いたのである。

熟じっとして、

「存じません。」

「存じないことがあるものか。」

「解^{わか}らなくツてよ。」

といつて清^{すず}しい目をぱつちりと開いた。蝶吉は、男の、凜^{りん}とした品の可^いい、取つて二十五の少^{わか}い顔を、しげしげと嬉しそうに瞋^{みつ}めている。

「それじゃあ、酔わされたんだとはいうまいから、どこで飲んで来た、それなら知つてるだろう。」

「あなた、また叱ろうと思つて、厭^{いや}よ。そんな真^ま面目^{じめ}な顔をしていらしちやあ……。だつて少しばかりなんですもの、」といい懸けて目を外^{そら}し、枕にしている神月の膝を着物の上から撮^{つま}んだが、固くちやんとしているの、指^{ゆび}尖^{さき}にかからない、絹布に皺^{しわ}を拵^{つね}えようと、抓^{つか}るでもなく、撫^なでるでもなく、爪^{つま}さぐつて莞爾^{にっこり}して、

「可いじやありませんかねえ、少しばかり、偶たまなんですもの、大丈夫さ。」

十八

「大丈夫？　そうさ、また大丈夫でなくたって誰が何というものか、酒はお前さんが飲むんじやあないか、そしてお前さんが酔ったんだらう、芸者の蝶吉が酒に酔ったって、私にやあ甘くも辛くもない、何も難しいことはありません。」と向むこうへ押遣おしやると、銚ち子こが袴はかまを着けたままで、盤の上をするすると歩いた。杯は一個ひとつ横よこになつて、飲みさしが流れていた。あえてこれを細こまかく断る必要

はないけれども、ちようどその銚子が歩いた時、蝶吉が起きたか
らのことである。

梓の羽織の袖に、鬚まげの摺すれ合あうばかり附く着ついて横よこ坐ざわりになつた
が、鹿しか爪つめらしく膝ひざに手を置き、近々と顔を差寄せて、

「おや、異おつう仰おつ有しやいますね、異おつなことを。何ですツて、」

蝶吉は詰め寄りそうにしていった、梓は今すべ迄までらした銚子を更てもに
手許てもとへ引いて、

「まずお酌しやくでもして頂たまこうかね、お爛かんざましじやありますけれ
ども、」

「ふん、」と言つたばかりで澄すまして見ている。

「いかがでございましょう、頂たまく訳わけには参まりませんか、どうです、

蝶さん、ここに是非一番君のお酌をと、厄介な、心懸こころがけの

悪いのが出来上ったんですが、悪うございますか。」

「はあ、随分宜よろしゅうございますよう。」

梓ちよくは猪口を拾って、杯洗の水を切り、

「結構な訳ね、宜しければ、どうぞこれへ、」

「おやおや唯ただいま今内の人におことづけをなさいました、蝶吉ねえ姐さ

んに酌をして欲しいと仰有いますのは、ちよいとお前さんかい。」

わたくし「私でございます。」

「おお、心懸いの可やっい奴やつじゃ、宜しい。さあぐツとお飲み。余り酔

わないように致せ、これ、女房かみさんがまた心配をするそうじゃからな

。」

「かしこま畏りましたが、一向さようなものはございませぬ。」

「なくても今に出来ます。その心懸なればきつと出来るから、さよう心得るじゃぞ。」

「はい。」

「一体、ようす容子が可よくツて、優しくツて、それで悪くまた学問とかがお出来遊ばしやあがつて、知った顔をしないでな、若殿様のようで、世話に碎けていて、あどけ仇気なくつて可愛らしくツて、気が置けなくツて、その癪たのも頼母しい、き様は女おんなころし殺ころしじゃ。よくない奴じゃぞ。方々の女の子が皆でみんな騒ぎやあがるで、可かわい哀あはそうに蝶吉が気ばかり揉もんでいるわえ、なぜそうじゃろかな。不心得な奴じゃ、その分には差置かれぬぞ。」とおぼつか覚束おぼつかなげに巡査のこわいろ声色こわいろを佳いい

声で使いながら、打合せの帯の乳の下の膨らんだ中から、一面の懐中鏡を取出して、顔を見て、ほつれ毛を搔上げた。その櫛を取直して、鉛筆に擬なぞらえて、

「コヤコヤ、いつかも蝶吉がお花札はなを引いた時のように警察の帳面につけておく。住所、姓名をちやんと申せ、偽るとためにならぬぞ。コヤ、」と一生懸命わらいに笑を忍んで、細りほっそした頬を膨らしながら、唇を結んで真面目である。最初はじめは何か取合あつて遊ぶ意つもりだった梓もあんまりだから、

「何だ、馬鹿々々しい。」

「コヤ、巡査に向つて何だ、馬鹿々々しい、き様は失敬な奴じやな。」

「可加減いかげんにしておけよ、面倒臭い。」

蝶吉はちよつと膝を突つついて、

「よう、巡査おまわりごとをしようよ、よう、可笑おかしくツてよ。」

梓は叱る訳にもゆかず、苦笑一番して、

「暢気のんきなもんです。」

手鞠の友

十九

神月梓は学士である。同窓の朋友の間にも、その温雅なる風采と、秀麗なる容貌と、学識の豊富なるをもつて聞えた、俊才で、且つ人魂と、流星と、意見の衝突以来、不快の念を抱いて、頃日夫人の許を辞して、谷中の寺に隠れたけれども、梓は子爵家の婿君である。すなわち華族の殿様であつて見れば、世に処してかかる待合などには出入すべき身分ではない。

もつとも地位あり、名声ある人の芸妓遊をせぬという限はない、立派に客たる品位を保つて、内に疾ましい処がなければ、まだしも世間は大目に見ようが、梓はさる身分でありながら、一待合の女房を見て、これを（おかみさん）といつて自ら謙り、相手の芸妓を捕えて、おいとも、こらともいうのではない、お蝶

さん、おまえさんは、という調子たるや、蓋し自ら卑うしたるものだと謂わざるを得ぬ。

少くとも青年の佳士、衣冠正しい文学士が、譬えば二人対向
 いの時、人知れずであろうとも独省みて恥辱でないことはない。

しかるに、梓は旧仙台の生で、土地の塗物師の子であつたが、
 豊なる家計の下に育つたものではなかつた。使に行く問屋の旦那
 にも、内へ注文に来る余所の小父さんにも、隣家の士官の奥方にも、
 向の質屋の番頭にも、いつも、可愛がられてはいたけれども、
 未だ敬礼された覚がないので、人に逢えばまず此方から挨拶をする
 もののように、余儀なくされて育つたのである。

加うるに、その母親というのは、その始江戸から住替えて来た

有名な芸妓げいしやだった、のみならず、これを使たよつて同じ仙台の土地へ後から出て来た母の妹夫婦も、また甚だ不遇で、年も措おかず夫が亡なくなつたので活計たつきを失うと、女の子が二人あつたのが、妹い揃いつて苦界くがいに身を沈しずめた。前世の因縁とでもいうのか、父の姉の子が一人、梓より年上であつたのが、それもまた同じ勤つとめの止やむを得ぬ境遇であつたから、中の好いい従いとこ姉妹が三人、年とし紀の姉なると、妹なると、皆みんなお嬢様ではおらず、女房にもならず、奥様にはもとよりなり、揃いつて世の中から畜生呼よばわりをされる身からだで。

母親は若死わかじにした、やがて父親も亡なくなつた。その遺言に因れば、梓の實の姉が一人ある。内の都合で、生れると直ぐ音信いんしん不通の約束で他へ養女に遣わしたのが、年を経て風たよりの便たよりに聞くと、それ

も一家流転して、同じく、左^{ひだりづま} 棲^{すま} を取る身になったという。野
 辺^{おくり}の送^{おく}が済んで、七々四十九日というのに、自ら恥じて、それと
 知りつつ今まで遂^{つい}に音信^{おとずれ}なかった姉^{あね}者^{ねじや}人^{ひと}、その頃^{ある}一豪商^{あう}の愛妾^{あいせつ}
 になつていたのが尋ねて来て、その小使^{こづかい}と、従姉妹三人が竜の
 腮^{あぎと}を探るような思^{おも}いをして工面^{おま}をしてくれた若干金^{おま}とで、ようよう
 後^{あととむらい} 弔^{うら}も出来たくらい、梓^{うち}の家^{うち}は窮^うしていた。

もつとも小学を卒^おえ、中学に入^いつて、ちようど高等学校に入っ
 ていたその学資^{がくし}は、父^{ちち}が膏^{こう}血^{けつ}を絞^{しぼ}つたものであることはいうま
 でもないが、従姉妹達が銘々、自分の境遇^{きんぐう}を悲^{かな}しむ余^{あま}りに、一門
 の中^{なか}からせめて一人、梓^{うち}さんが男だからと、石筆^{いしひつ}を持^もつて来る、
 算盤^{そろばん}を買^かつて来る。本の葉^{しおり}に美^{うつく}しいといつて、花^{はな}簪^{かんざし}の房^{ふさ}を

仕送れば、ちいさ小な洋服が似合うから一所に写真を取ろうといって、姉に叱られる可愛かわゆいのがあり。

二十

学校の帰途かえるさ、驟雨にわかあめに逢えば、四辻から、紺蛇の目で左ひだり褻づまというのが出て来て、相合あいあいで手を曳ひいて帰るので、八ツ九ツ時分、梓は酷ひどく男の友人に疎うとんじられた。人は皆竹馬の友を持つてるけれども、梓はかえって手鞠おいはご、追羽子の友を持っていたのである。

父親てておやが亡なくなって、姉が初めて訪寄といよったのが機会きかいで、梓は高等学

校の業を卒おえて上京した、学資は姉の手から——その旦那の懐中から——出たのであるが、学年中途にして志未いまだ成らず、年とし紀はようよう梓より二ツ上の姉が、両親の後を追つて、清く且つ美しい一輪の椿、床の花はな瓶いけをほつりと落ちた。

最後にその三人みたりの従姉妹が、頭のもの、帯一本、指環ゆびわを一ツ売つたという、二十円余あまり二月足らずの学資を達引たてひいてくれたまでで、あわれ一人にんは目を煩い、一人は気が狂つたようになり、いま一人は人に連れられて北海道に渡つたという、音信おとずれがあつて、それなりけり。

という境遇であつたので、幼少の折から、紅くれないの曙あけぼの、緑の暮、花たかどのの楼の、柳こいえの小家こいえに出で入はいりして、遊里に馴なれていたのであるが、可な

懐つかしく尋ね寄り、用あつて音信おとずれた、往ゆくさきざきは、残からず抱かかえであり、分わけであり、いずれも主人持のことであるから、勢いきお已おむことを得ず、帳場に片膝立てている女房に挨拶をせねばならず、奥おくに搔かままききを懸けて昼寝をしている、亭主あたまに天窓あたまを下げねばならぬい。

単にそう云えば梓ひとが酷ひどく意気いくじ地じのないように聞えるけれども、人の召使は我が召使ではない、玄関番の書生くつが、来客の履くつを取つて送迎するのを見て、来客たるもの、自家を尊大にして己おのれに従うものだと思ふのは失敬であろう。履を取るはすなわち主公おのれに使うの道で、あえて来客に対する礼ではないから。

芸げい妓しやも自家これに客となつて、祝儀はをは奮ずみ、玉ぎをよくく附けて、

弾け、飲め、唄え、酌をせよ、と命令を奉ぜしめた時ばかり、世の賤業を営むものとおとしめて宜しいけれども、臂鉄砲に癩やくだま癩玉を込めた、ドンを啖くらい、鳩玉で引退るに当つてや、客たるものは商となく、工となく、武となく、文となく、戦たたかに敗けたものと謂いわなければならぬ、いわんや、さつさと貰われてのツけから、対あ手にされざるものにおいてをや。

忘ぼう八はちの亭主、待合の女房おかみといえども、己遊客おのれとなつてこれが敬礼を受ける場合でなく、一個人としてここに訪とい寄れば会釈をしなければならぬ数すうで。

たとい、売淫婦といえどもその妹いもたるものは、淑女であつても渠かれは姉さんである。たとい山賊といえども、山路ふみまよにおのれ蹈迷

った時寸毫すんごうの害も加えられずして、かえつて此方こなたより道を聞いて、麓ふもとに下りることを得たりとせんか、渠は恩人である。世を害するものなりといつて訴人に及ぶは情において忍ばるる処ではあるまい。しかるにこれを訴人して、後にざまあ見ろをくらつて、のり血べにになつて悶もがくのは、芝居でも名題の買つて出ぬ役やくまわり廻であらう。

母をはじめ、姉、従姉妹、幼時における梓が七情を支配したものは、皆苦勞人であつた。あえてこれ天下はばかに憚る処なしといえども、しかれども、数すうの奇なるもの、顧かえりみれば無慙むざんな境遇。

湯帰り

二十一

梓が上京して後東京の地において可懐なつかしいのは湯島であつた。湯島もその見晴みはらしの鉄の欄干よに凭つて、升形の家が取囲んでいる天神下の一廓かくを詠めるのが最も多く可懐なかつた。

可懐すしさもまるで過世すげの夢をここに繰返すようなもので、あえて、ここで何等しいのことを仕出しただことはないが、天神下はその母親の生れた処だということについてである。

されば故郷を去つて独り寄宿舎に居る、内気な、世馴なれない、

心弱い、美少年は、その界限かいわいに古びた廂ひさしを見ては、母親の住んだ家ではあるまいかと思ひ、宮の鰐わにぐち口すがに縋すがつては、十七八であつた時の母の手が、これに触れたのであろうと思ひ、左側になら竝ならんだ意気な二階家の欄干、紅裏もみうらの着物が干してある時、夜よは殊に障子に鏡かがみ立たての影の映る時、いつもいつも心嬉しく姿寂しく、哀れさ、床しさが身に染みて、立去りあえずたたずイむのが習ならいであつたが、恋しさも慕したわしさも、ただ青海あおうみの空の雲の形を見るように漠然とした、幻に過ぎなかつた。しかるにある時、それを形あらわに現して、梓の感情を支配する、すなわち、床しい、懐しい念のすべてをもつて注ぐべき本尊、譬たとえば婦人が信仰の目じるしに、優しい、尊い、気高い、端嚴たんげん微妙びみょうなる大悲觀世音の御姿みすがたを持つてゐる

ようなものが出来たのである。

ちようど玉司子爵の令嬢いまは梓の夫人たる竜子から、まだ仏文の手紙の来ない先、姉が死んで、従姉妹が離散して、学資が途切れたので、休学して、しばらく寄宿舎を退いた間、夫婦で長屋を借りて世帯を持っていたいささかの知己の処に世話になったが、その主人また大の貧窮で店立を命ぜられて、一日九尺二間の城を明渡すの止むを得ざることに立至った。その日も梓は例のごとく、不遇の身を湯島の境内に彷徨わせて、鉄欄干に遺瀨のう時を消して暮方に家に帰ろうとする、途中で会った友達夫婦が、一台の荷車の両脇に附添って、妻恋の下通を向うから曳かせて来て、

(天神下の××番地へ引越す、後から来たまえ。)

(神月さん、その時この車に付けあまつたがらくたを隣家へ預けて来たんですから、車を雇つて持つて来て下さいな。)

と暢気なもので別れて行つた。意を了して、その頃 同朋町

に店借をしていた長屋に引返して、残りの荷物を纏めたが、

自分の本箱やら、机やら、二人乗には積み切れないで、引越車をまた一輛。

天神下までは路も近し、洋燈を手にして宰領して、男坂の裏を抜けて、目的の処へ行くと、さあ知れない。

向うが言い違えたか、こつちで聞違えたか、覚えた番地を差配にまでかかつて尋ねたが、皆くれ分らず、荷車について、ぐるぐ

る廻ってる、日は暮れる、暗くなる、二三時ときもかかったので、間が抜けてるじやありませんか、と曳子ひきこはぶつぶつ叱言こつことをいう。引ひつかえ返した処で寝る家もない場合。梓一人が迷惑して困こうじ切つてゐる処を、灯あかりがないと、交番で咎とがめられたが、提ちようちん灯の用意はなし、お前さん。その手に持つてる洋燈をお点つけなさい、と曳子ひきこは中ちゆうばらツ肚だから口の裡うちで、幾たびも、へん間まぬけ抜だな。

二十二

さるほどに神月梓は、暗夜、町中まちなかに灯ひともした洋燈ランプを持って、荷車の前に立たせられて、天神下をかしこっこ、角の酒屋では伺い

ます、たばこや 蓑屋の店でも少々、米屋の窓でもちよいとものを。いずれも知らない、存じませんな、を言わるるたび、背後うしろから、嚙着かみつくように叱言こごとをくツて、ほとんど耐え切れなくなると、雨が降出した。

梓あおは蒼くなるまでに、果はては氣を苛いらつて、額がつツぱると思うほどな癩癩筋かんしやくすじ、一体大人しく、人に逆らわず、争わないだけ、いつもは殺しておく虫があるのでむらむらと、来た。それに氣が小さいから、取詰めて、持つてる洋燈をこの荷車に叩きつけよう、そして粉微塵こなみじんに砕けたら、石油に火が移つてめらめらと燃えて無くなるであらうとまで思った。これはしかねない少年であつた。

その時、黒縮緬くろちりめんの一寸紋。お召めしの平生着ふだんぎに桃色の巻つけ帯まき、

衣紋えもんゆるやかにぞろりとして、中ぐりの駒下駄、高いので丈せいもす
 らりと見え、洗あらいがみ髪かみで、濡ぬれてぬぐい手拭てぬぐい、紅絹もみの糠ぬかぶくろ袋ふくろを口くわに銜くわ
 て、鬢びんの毛けを搔かきあ上げながら、滝の湯とある、女の戸を、からりと
 出たのは、蝶吉で、仲之町からどこにか住替えようとして、しば
 らくこの近所にある知己ちかづきの口入宿くちいれやどに遊んでいた。年とし紀十七の夏
 のはじめ、春の名残なごりに降ろうとする大雨の前で、戸外おもては真暗まっくらな
 出であいがしら会頭かいづら。蝙蝠こうもりが一羽ひらひらと地を低ひくう飛んだと見た、早
 や戸を閉めた縄なわのれん暖簾もを洩れて二筋三筋戸外おもてにさす灯の色も沈ん
 だ米屋うしろを背後こなたに、此方こなたを向いて悄しよんぼり然しん洋燈やうていを手たにしてイたんでる
 一個白面の少年を見たのである。梓その時はその美しい眉まゆも逆釣さかづ
 ツていたであろう。まさに洋燈を取つて車の台なげうたに抛なむとする、毗めじり

の下さつたのは蝮まむしより嫌きらな江戸こッ児肌。人見知ひとみしりをせず、年は若し、かけかまいのない女であるから、癩癩かさが高ぶつて血さかも逆さからんとする、若い品の良いいを見て嬉たしくつて耐たまらず、様子を悟さとつて声を懸かけた。

(ちよいとどこへいらつしやるの、)

一ひと幅はばの赤とい灯ともが、暗夜かくを劃ひして閃ひらくなかに、がらくたうの堆ずい荷車ひきこと、曳子ひきこの黒くろい姿すがたを従したがえて立たつていたのが、洋燈やうていを持もつたま前まへ出でて、

(家うちを探たしてゐるんです。)と内心うちに激うしたれば声こゑも鋭とく答こへたのである。

蝶吉てつきちは莞爾にこにこ々々しながら、愛想あいさうよく仔細しさいを尋たねて、

(そう、今日お引越ひっこしなすつたの、何でしょう、兵児帯へこおびをして、
 前まえ垂たれを懸けた、肥ふとった旦那と、襟えりのかかった素す裕あわせで、器量きりょうの
 可いいかみさんとが居る内でしょう。そうなの、それじゃあついでそ
 こなんだわ。) といつて、濡手拭ぬてぬぎで指ゆびさしをしてくれた。蝶吉はその
 長屋の表おもてどおり通との口入宿くちいりに居たのであつた。

この口入宿くちいりの隣家となりは、小さな塩煎餅屋しおせんべいやで、合角あいかどの花はな簪かんざし
 を内職にする表長屋との間に露地いぎがある。そこを入ると突つき当あたり
 が黒板塀。ついて右へ廻ると粹いぎな格子戸の内に御神燈みかみとうを釣つるしたの
 があるが、あらず、左へ向うと、いきなり縁側えりがわになつて、奥の石
 垣みとおが見透みとおされる板屋根の小家こいえがある、そこが引越先であつた。

この一廓は、柳にかくれ、松が枝えに隔てられ、大屋根の陰にな

り、建たて連つらなる二階家に遮られて、男坂の上からも見えず、矢場
 が取払われて後、鉄欄干から瞰みおろ下しても、直ぐ目の下であるのに、
 一棟の屋根も見えない、天神下のかくれ里。

描ける幻

二十三

さて件くだんの花簪屋と煎餅屋との間の露地口の木戸は、おしめ、古
 下駄等、汚よご物これもの洗うべからずの総井戸と一般、差配おおやさん様とりきお取

極めで、紙屑拾不可入かみくずひろいいるべからず、午後十時堅くしめきり切き。

梓が引越してから五日目の夜、十時を過ぎて帰ることがあつた。木戸へ来ると、鍵がかかつていた。向うの湯屋では板の間を磨こする音、男坂下なる心城院の門も閉しまつて、柳の影も暗く、あたりは寝て、切通きりとおしの方かたには矢声高く、腕車くるまの疾とくきし転ころるのが聞えたが、重宝なもので、煎餅屋の店から裏長屋へ抜けられるのだから、木戸を閉切つたあとにはこれが例、女房が見つけて、ちゃんと心得、（書生さんの旦那、お穿物はきものをお提げなすつて、こちらから。）と言つてくれた。

極きまりも悪おもてし、面を背けて店口から奥へ抜けようとすると、同おなじく駒下駄を手に提げて裏口からはらりと入つて来た、前日の美人とば

つたり逢つた。袖も摺合うばかり敷居で行違う。振の明から溢れる緋の長襦袢が梓の手にちらちらと搦むばかり、颯とする留南木の薫。顔を見合せて、

(失礼、)

(……………)

(ちとお遊にいらつしやいな。)と言ひ棄てて、それでもまだ答をしない中に、早やばたばたと戸外へ出たが、

(おばさん、お邪魔様、)と言ひさまに口入宿の表の戸がらから、鈴を鳴らして入つた。蝶吉は今夜裏なる常盤津の師匠の許に遊びに行つた歸であつた。

梓は幾ほどもなく仏文の手紙を得て、この隠家を出て、再び

寄宿舎の卓子テイブルにバイロンの詩集を繙ひもといて肅然とする身になったが、もとより可懐なつかしい天神下はますます床ましいものと成り増まつたのである。

今こそあれ、件くだんの美人を梓は誰なりと知る由なく、ただかの時と、その時と再度のみ。それもつくづく見たのではないから、年紀しのほども顔かお立だてもよくは分らなかつたけれども、ただ彼が風俗は一目見て素人でないことを知った。宛えんたるこの大都の芸妓げいしやの風俗、梓はぞつとしたのである。

しかも窮苦きわま極まりなきに際して家を教えられたのであるから、事は小なりといえども梓はおおい大なる恩人のごとくに感じた。感ずるあまり、梓は亡母なきが仮あらいに姿を現して自分を救ったのであろうと思つ

た。あえてここに更あらためていう、梓の母は芸妓げいしやであつた。そして天神下はその生れた処である。

幾多の星霜を経てはいるけれども、かしこの柳、ここの松、湯屋も古くからあるというし、寺の門前のは今もあたりの女の子が打集うては遊んでいる、鞠まりうた唄も唄うている、廂ひさし、軒、土の色も有まの儘。これがむかし母親の住うちんだ家ではないかと心の迷うのも慕あまわしさの余あま、しばらく住んでいた、破あばらや屋の太いたく古いのにつけても、もしやそれかと、梓はあたかも幻というものを画えに描かいて、目にこれを見るような思おもがした。それこれの聯れん想そうから、誰とも知らず、その頃の蝶吉を、母おもの倅かげに肖にたように思つてた折から、煎餅屋の店で行違つた時も、母があたかもその年とし紀で、その頃、

同じことを、ここでして、こうして育つたのであろうと、あたかも前世紀の活いきた映うっしえ画えに接するがごとく感じたのである。

朝参詣

二十四

梓が大学の業を卒おえて、仏文の手紙の姫、年紀としは二ツ上の童子に迎えられて、子爵の家を嗣つぐ頃には、地主の交替か、家主の都合か、かの隠家の木戸は釘くぎづけ附つけのしめきり切きりとなつて、古家のおもかげ倂のぼもば偲ばれ

なくなつた。構かまえ外そとを廻つて見ると、今までとは方面の違つた
 町の側、酒屋の蔵の廂ひあわい合あひにひとすじほの一条灰暗い露地が開かれた。大方
 そこから旧もとの借家へ通ずることが出来るのであらうと思つばかり、
 いうまでもなく、先に世話になつた友人夫婦は、疾とくに引越して
 行ゆき方がた知れず、用もない処、殊に、向合つて御膳ごぜんを食べる、窓か
 ら手を出して、醬おしたじ油を借りようという狭い露地内へ、紋もんつき着の
 羽織でうそうそ入られたものではない。入つて見られず、伺うて
 分らなくなると、ますます可懐なつかしさは増まさつたけれども、これまで
 と違つて玉司子爵梓氏となつてからは、邸やしきを出入の送迎も仰々し
 く、往來ゆききの人の目にも着く、湯島のそぞろ歩行あるきは次第に日おを措おき、
 週を隔つるようになったが、遠いが花の香で、床しきはまた一ひとし

入。

梓はその感情をもつて、その土地で、しかも湯島詣の朝、御手
らし洗の前で、ききょうれん桔梗連の、のぼり若葉と、ほととぎす幟と、かかけあ杜鵑の句合の掛
んどう行燈。雲が切れて、こずえ梢に残月の墨絵の新しい、あけぼの曙に、蝶吉に再
 会したのである。

今日しも寄宿舎の紅茶会で、竜田若吉が言つたごとく、梓はそ
 の時もある意味をもつて、蝶吉に助けられた。

ささい些細なことだけれども、一体貧窮刻苦の中に育つた人の、文学
 士で玉司子爵夫人の恋媚でありながら、ちつとも小遣こづかいなどは気
 にしないので、持って来たとも覚え、忘れて来たとも知らず、
 落したのか、紙入というものを持合せず、水すずを注すごうとして干ひしゃ

杓くを取ると、

(水銭をおくんな。)と豆を装もつてならべてある土かわらけ器の蔭から、丸々ツちい、幼い顔を出されて、懐を探るとない。袂たもとに手を入れるとない。左にもない、帯の間にはもとよりない。

思わず、どぎまぎして眩つぶやいた。

(どうした知らん。)

(水銭をおくんな。)

梓きまりは極きまりが悪いので、

(おや、おや。)と疑わしそうに言ったけれども、一種の見得で、自分には掏すられたあてもないのである。

子供は同じことを、

(水銭をおくんな。)

(まあ、懷中を忘れたそうだよ。)

目をぱちくりして、委細構わず、

(水銭をおくんな。)

ただ六ツばかりの小児こどもに対しても、梓さがは性としてこれには顔を

赧あかくして、立場なく後へ退さがろうとする。背後うしろに立ったのが、朝あさま

参いりの婀娜あだたる美人で、罪もなく莞爾にこにこ々々しながら、縷しゆす子の不断

帯の間から、膨ふつくりと懷紙ふくに包んだ紙入しりを抜いて取り、掌てのひらに拈ひげて

緋地ひじの襪つづれ襖にしき錦にしきの紙入しりを開いた中から、指ゆびで環わを拵こしらえたような、

小さな玩おも弄ちやの緑きの天鵝びろうど絨じゆの墓がまぐち口くちを引出して、パチンとあけて、

幼おさなご児ごが袂たもとの中なかを覗のぞくように、あどけなく、嬉うれしそうに、ぱちち

りした目を細めて見ながら、一片ひとひらの、銀の小粒を、キラリと撮つまんで、向うへ投げた。

（小僧さん、旦那様の分もあるんだよ。）

梓は屹きつとなった。

美人は顧みて嫣然えんぜんとして、

（あなたや、さあ、手をお出しなさいな。）

梓はここに到つて、胸中まず後の謝恩を決しながら、衝つと差出した、医師のごとく、爾しかく綺麗な手に、一杯の清水せいすい、あたかも珠たまのごときを灌そそいで、颯さつと碎けると更に灌いだ、雫しずくも切らせず、
 （私わたいのを使つて下さらなくつて。）と落着いて、静しずかに秋波なかしめに視みていいながら、ちよいと、仰向あおむいて

端を引いた、奉納の手拭てぬぐい、いまだ手摺てずれもなく新しい。

茶色の地に、白で抜いて、数寄屋町、大和屋内——ちよう吉——とある。

（姐ねえさん、きつとお礼をする、）と梓は心を籠こめてはじめていった。

（あら、何ですよ、）

（いいえ、）と押えて、そのまま別れて敷石の上を渡った。額堂の軒、宮の廂ひさし、鳥居の下もと、御手洗の屋根に留まった鳩が、あちらこちらしばしば鳴いて、二三羽、二人が間をはらはらと飛交わした。納豆々々の声遥はるかに、人はあたりになかったのである。——この間二年余相あまりたち申もうし候そうろう。歌枕の今夜の逢あい曳びき。

言語道断

二十五

「ちよいと今夜は私わたい嬉しいわねえ、こないだから塩あんばい梅ばいが悪くツて、それにお前さんは久しくおいでなさらないし、鬱ふさいでばかりいたんですよ。」と急にまたしめやかになつた。氣の変ることの極めて早い、むしろ鋭いといつても可いい。この女の心は美しく、磨いた鏡のようなものであろう、月、花、鶯うぐいす、蜀ほととぎす、魂たま、来きたつて

姿を宿すものが、ありのまま色に出るのである。

梓も可なつかし懐うなずげに頷いて、

「ついちつとばかり忙しかったもんだから、病気とは聞いていたけれど。」

「精出して勉強をしていたんですか。」

「ああ、」と何気なく答えたがふと気に懸かつた様子で浮かぬ顔をした。

蝶吉はもとより何の気もつかないので、

「そう、生意気だねえ。」

「失礼な、人が勉強してるというのに、生意気だということがあるものか。」

「あなたや、馬車に乗ろうと、いうんじやあなし、詰つまらなくツてよ。また煩いでもすると悪いもの。」

「だって怠けてちやあ食べられませんか、」

「私わたくしが達引たてひくから可いいわ、」といつて蝶吉は仇あどけ気ない顔に極めて

老実な色を装った。梓はこれを聞いて、何か気がさしたような様子であつたが、笑わらいに紛まらして、

「どうぞ宜よろしく、」

「ええ、それはもうね。」

「しかし、私は駒下駄こまげじゃあ厭いやなんだ。」と思おもい切つたといふ語氣で冷ひやかにいって、屹きつと蝶吉を見た、目の中には一種おもの思おもいを籠めたのである。

蝶吉はさも思い懸けなかつたらしかつた。

「おや、おや、異おつなことを、」といつて、澄すましたもの。

梓はここに至つて居いずまい住を直した。

「いいえ、異なことをいうんじやあない、隠し立だてをされてはおかしくないよ、お前、松の鮓すしは一体どうしたんだえ、」とさすがに問い兼ねて当らず障らず。

「厭よ、やくのかい、貴あなた方に懸けるような対手あいてじやあなくツてよう、初心らしいことをいつて、可笑おかしいわねえ。」

「何しろ、全くか。」

「はあ、」と極きまり悪げに男と見合つてた顔の筋うごかを動して、

「それはあの、何なの、だつて私わたいは何にも知らないんですもの、」

と俯向うつむいて膝の上を、煙管きせるで無意識たたに敲きながら、

「だつてもうそれつきり何だつてあんな奴やつは何だろう、それを気に懸けて下さるのは、あんまり可哀かわいそうよ、蝶吉じゃありませんか。」といつて自らたゆげに見えて微笑ほほえんだ。

「その事じゃあないよ、お腹なかの……」といいかけて、梓は我ながら面おもてを背けた。

「まあ、」

黙つて、俯向うつむいてしばらくして、蝶吉は顔あかを赧あからめ、

「貴方、誰に聞いて来て、ようどこから知れたのよ。」

「なに少しばかり気みちになることを途で聞いたもんだから、つい、」
「もっとまだその上に知つてるんですか、」

蝶吉は驚いたような声。

二十六

「悪く思ってくれちやあ困るよ、僕はね、知ってる通とおり、遊ぶのはお前がはじめてだ。商売だから嘘を吐くもんだと思つていたんだけれど、お前が見ツともない、たというそにでも好いたとか、何とかいって、そうして好いた真似まねをして見せる分には、好かれた者に違いはないのだから、好かれたんだと思つておいでなされば可いい。いやに疑るのは見つともない、男らしくもない、とそういうから、成程そうだと、自分極ぎで、好かれてると思つてる。あ

あ、ずっと惚ほれられたんだと思つて、これでも色男なりすまに成済せいして
 いるんだ。だから、何も洗い立だてをして、どうの、こうのと、詮せんぎ
 議だて立だてをするんじゃないやあないけれども、今来る途中で、松の鮎すしが、
 妙なことをいって当あてつ擦こすつたよ。」

「厭いやだ！」

蝶吉は閨ねやを透すきみ見みしたものを、辱はずかしめ、且つ自分のしどけなかつ
 たのを愧はずるごとき、荒あツぽい調子であつたが、また自ら危あやぶんで、
 罪の宣告を促して弱々しく、

「何か言っていましたか。」

「残らず、」と神月はきつぱり言った。

「へい、」と真面目に、蝶吉はたちまち三ツばかりものの言いぎ

まに年紀を取ったが、急に氣を換えて、

「だって、すっかり快くなつてよ。西洋じゃあ皆平氣ですつて。

また田舎なんぞには 当 前だと思つてますとさ、私もうさつぱりしたんです。

体にも障らなかつたといつて、今夜ねえ、床上げやら、何やらで、内の姐さんが赤飯を炊いてくれました。そして一杯飲んだんですもの、祝つたくらいじゃありませんか、不可くツて、え、え？」

蝶吉は梓が何か易からぬ 面色があるのを見て、怪しむ様子。

梓は急に語も出でず腕を拱いて默然としていた。

「よう、何を鬱ぐのよ、私のことなんですか、不可くツて、」

「可いも悪いもお前、」

言語道断だ。

「だってしかたがないじゃありませんか、」と詮せん方かたなげに蝶吉はぱっちりした目を細うして、下目使いで莞爾にっこりしたが、顔を上げてまじくりして、

「もつとも何なのよ。一度そんなことをしたものは、もうもう一生子供は出来ないツていうのよ。ですけれども、貴方あかんぼ嬰児あかんぼはいらないんでしよう、ぎやあぎやあ泣うるさいて可煩うるさいから大嫌きらだつて言つたじゃありませんか。ですもの、三ツばかりの児こが、父さん、母さんツて、生意気な口を利くのが可愛あいんですから、余所よそから貰もらうことにでもしましようにツていったら、それさえ面倒だ、可愛

い口を利かせるなら鸚鵡おうむを飼えば沢山だつて言つたんですもの。」

梓呆れ果てて言葉なし。

蝶吉はしたり顔で、

「ほら、御覧なさいな、可いじゃありませんか、私もわたい嬰兒なんか欲しくないんですから、」

と言ひ懸けて少し体を斜ななめにして、秋波ながしめで男を見ながら指さし指示しめすがごとく、その胸に手を当てた。

「こつちのお乳をお菜かずにして、こつちのおおき大い方をお飯まんまにして食べるんだつて、」とぐツと緊しめ附けて肩を窄すぼめ、笑顔で身み顫ふるをして、

「厭、痛いわ!」

二十七

梓は耐^{たま}りかねて、

「お蝶、」とちと鋭^とくいうと、いつも叱^{はぐ}るのを外^{はぐ}らかす伝^でで、蝶吉は三指^つを支^ついて的^ま面^もに潰^{つぶ}し島田^にに奴^{やつ}元^こ結^もを懸^{ゆい}けた洗^あ髪^{らい}の艶^{つや}かなのを見^やせて、俯^{うつ}向^むけに畏^{かしこ}まり、

「召^ましましたは何御用^ごにござりまするな。」と男^この仮^わ声^{いろ}を造^つて、笑^わいたさを切^こたく耐^こえる風^{ふう}情^{じやう}。余^ありのこと^{こと}に氣^きの弱^{じやく}い梓^しは胸^{むね}が充^い満^{っぱい}、女^{おんな}が見^みないので心^{こゝろ}の張^{はり}が弛^{ゆる}んだか、瞞^みめてい^いる目^めにほろりとした。が、思^{おも}切^きつて、衝^つと寄^よつた、膝^{ひざ}を膝^{ひざ}に突^つ掛^かけて、肩

に手を懸けるとうっかりした処を不意に抱起されて、呆れるのを、
 熟と噴め、

「可哀かわいそうだな、お前は不ふ幸しあわせに生れて来て、何にも世の中の
 事というものが分らないんだから、私は何にも咎とがめやしない。た
 といここで、目の前で、やあい、欺だましてやった、二本棒め、殺ころしを
 言やあ嬉しがって、色男が聞いて呆れる、ざまあ見やがれと、愛あ
 想いそづかし尽を言つて舌を出した処で、ちつとも肚はらを立てはしない。

いいえ、たとい悔しくツて、肚は立つても、お前を不人情だと
 も何ともいわないよ。

こうすりや薄情だ、不人情だと思つてされてこそ、癩しやくだけれど
 も、ちつとも知らないで言うことなり、することなら、不都合で

も何でもなからう。

だから、何にも言わないが、その何だよ。お前は僕のことを初心だ、坊ちゃんだ、何にも知らないというそうだ。勿論三が下のものやら二が上るものやら、節は伸すもんだか縮めるもんだか、少しも知らない。通だとか粋だとかいうことは、からももんじいで分らないけれども、意気だといって、この寒中、綿の入らない着物を着ていりや、体に毒だということを知ってるんだ。そしてまたここらの芸妓は綿のはいったものを引摺ってるといつて、お前の豪がることも知っている。

成程薄着ですらりとして、そりや姿は可いだろう。ものが間違つて、馬鹿げていて、仇気ないのが可いとして、わざとさえ他愛

ないことをいうようにしこまれるくらいだそうだツてな、字引と首ツ引で、四角い字、難かしい理窟ばかり聞いてた耳に、お前が、訳の分らない、他愛のない、仇気ない、罪のないことを言つてくれるのが嬉しかった。なに面白かつたんだ、面白いといやあ慰だなぐさみ。それが段々嬉しくなつて、可愛らしくもなり、ついこういうことにもなつたんだが、他愛なさも、仇気なさも、お肚を……可いかい、政府おかみへ知れりや罪人だぜ。人にやあ交際つきあいも出来ないようなことをしながら、赤飯を食べさせられて、酔つて来るようになりや沢山だ。「とひそひそながら声と共に手に力が入ったので、蝶吉は赧あからむ顔を外そらしもならず、呼吸いきを引くように唇を動かしている。

様子を見守り、

「可哀そうに、決して、それを責めるのじゃあない。さつきも言
う通とおり、お前がお前だから何とも思いはしないけれど、お前は十九
で、私は二十五。七ツ違いの兄さんだ。まあ、妹だと思っという
から聞きな。」

下かた

二十八

さればぞ思い当る。一月ばかり前の夜、同じこの歌枕で会った時、蝶吉はそれとはなく、頻しきりに子が一人欲しくはないかといったのを、気にも留めないで聞きき棄すてにしたが、松の鮎すしの毒口を、ここで聞正せば實際で、梓は思い懸けず、且つ驚き且つ呆れ、あわれにも情なさけなくも思つたのである。

梓はかつて、蝶吉の仇あどけ気ない口から、汐干しおひに行つて、騒ぎ歩いて、水を飲んだ、海水は塩しよツぱいということをし、さも大なる学理を発見したごとくにいうのを聞かせられた。

子供の中うち悪いたずら戯たわぶをして叱なぐられると、内を駈かけ出して、近所の馬鹿ばやしの囃ばやし子この中へ紛ま込んで、チャチャチャツチキツツと躍はつて、追駈おっかけて来た者が分らないで黙もつて見遁みのがしては歸かえつたが、私わたい

の顔は今でもおかめの面に肖にているかといつて、尋ねられたこと
もある。

その気であるから、蝶吉がおもてを歩いて、生意気だと思やつう奴
には突当つつてやるといふから、何を弱虫、先方さきが怒おこつたらどうす
るといつて窘たしなめれば、打ぶたれそうになつたら二十五座へ紛ま込んで、
馬鹿ばか囃は子を躍はつてよ、と真面目まじめでいふのだから耐たまらない。まさかに
今十九にもなつて、そうとは信じもすまいけれども、口でいふよ
うな幼おきなごころ心こころは、今もなお残のこつてゐる。墮胎だたいをしたものは刑法の
罪人だといえ、何の事かもとより分わらず、お前まへ巡査じゆんさに捕つかつて牢ろう
へ入れられなけりやならないといえ、また二十五座へ遁にげ込んで
躍はるといふであらう、手のつけられたものではない。

さまでに世の中の事というものが分らない生立ちが、馴染むに従つて知れば知れるほど、梓は愛憐の情の深きを加えた。

さらぬだに蝶吉は恩人である。殊に懐旧の情に堪えざる湯島の記念がある上に、今はある者は死し、ある者は行方の知れない、もの心を覚えてから、可懐しい、恋しい、いとおいしい、嬉しい情を支配された、従姉妹や姉に対するすべての思を、境遇の斉しい一個蝶吉の上に綜合して、その情の焦点を聚めているのであるから身にかえても不便でならぬ。

まして打明けた蝶吉の身の上を悉しく知つてからは、謂うべからざる同情の感に打たれたのである。

梓は何となくよく似た身の上だと思つた。

蝶吉の母親は旧京都もとのしかるべき商賈しょうごの娘であつたが、よくある、浄瑠璃じょうるりの文句にある、親々の思いも寄らぬ夫つま定めで、言いわ交した土佐の浪人とまだ江戸である頃遁げて来た。二人で根岸ねがしに隠れている中うち、時世ときよといい、活計を失つて、仲之町の歌妓うたひめとなつた、且つ勤め、且つ夫に情を立てて、根岸に通つている内に、蝶吉は出来たので。

子持の母も芸で通り、馴染なじみの座敷では小女こおんなが連れて来ると、背後うしろを向いて、三味線を下に置いて、懐を開けて乳房を含ませるという境遇であつたが、誕生すまを済して、蝶吉がようやく立つて歩くようになる、根岸では、父が病やまいの床に倒れたがまた起たたなくなつた。

越えて三歳みつになる時、母親は蠮かき殼がらちよう町の鼯ひいきぎやく鼠きやく客やくに、連兎つれこは承知の上落籍ひかされて、浜町に妾宅を構えると、二年が間、蝶吉は、おんば乳母日傘で、かあちゃん、かあちゃんと言えるようになった。

二十九

それもしばらく、米屋町は米の上り下りで人間の相場が狂い、妾宅の主人は大失敗で、落魄らくはくして、最後に一旗という資本がないので、心まで淋しくなり、蝶吉の母に迫って、その落籍ひかしただけの金員耳を揃えて返せという。

蝶吉の母は根岸の情人いひひとが亡なくなつてから、世を味気なく、身をた

だ運命に任せていたので、いうことに逆らわず、芳町から再勤したが、足りない金子は、家財を売って、それでもまだ償われなかつたので、蝶吉を仲之町の大坂屋というのに預けた、年期が十三年。

廓くわくわの抱妓かかえの慣例として、色はきつと売らさぬ代り、芸事にかけてはいかなる手段をもつて仕込んでも差し支えはない、少々痛いおもいをさせてもという口約束をしたのであるから、そのせだけようと云つたら方外な。

座敷は三人が一组、姉株ねいしゅの芸妓げいしやが二人、これに蝶吉が、下したか方たを持ってつ跟ついて行くのであつた、といつて、いつか雪の降る夜よ、身の毛を悚よだ立てて梓にその頃の難苦を語つたことがある。

座敷がある、客はというと、あの土地では夜が更けてからのが多い。それという声が懸ると、手取早く二人の姉分の座敷着を、背負揚、扱帯、帯留から長襦袢の紐まで順序よく揃てちやんと出して、自分が着換えるとその手で二人分の穿物を揃えて、三味線を——その頃腕達者な烈しい姉は、客の前で弾切ると糸を掛けてる中も間が抜けるといつて、伊達に換え三味線を持ったので——四張。呼ばれた青楼の帳場まで運んでおいて、息を切つて引返す、両手に下方を持って駈着ける。

それから四張の三味線を座敷に運んで、調子を合せて、差置くや否や、取つて返して、自分が持の下方の調の緒をメ《し》める時分には、二人悠々と入つて来る。穿物の雪を落して、片附ける

間も心が急せかれ、座敷へ上あがるとお座附の済む頃で、膝に手を置く猶予もなく、それ下方といつて責められるが、指の皮が破れてる上に冷たくツて手がかじかむ。息が切れて、もう小鼓を肩に振懸ける力もない。

これを梓に言った時、蝶吉は床から出て、友染の夜具の袖を敷いたと見ると、長襦袢のまま片膝を立てた。その上に手を翳かざして、
(私わたい小さくツてこれんばかりだったんですもの、鼓ばかりで体がどこにあるか分らなかつたの。)と、いいつつ片手を肩に懸けて、小鼓を構える姿で屹きつと直つた。鬢びんの毛ははらりはらりとその雪のような素顔に乱れたが、往時を追懐する目も据すわつて、いうべからざる悲哀の色を浮うかべたので、梓は思わず寝衣ねまきの襟を正して起きた。

とんと打入れるはずみをくツて、腰も据らず、あおむけひつ仰向に引くりかえ
 ることがある、ええだらしが無い、尻からやけひばし焼火箸を刺通して、
 畳の縁へりに突立つつたててやろう、転ばないまじない呪禁にと、陰では口汚くののし詈
 られて、帰ると耳を引張ひっぱつて掌で横すつぼう。襟首を取つて伏せ
 て、長煙管ながぎせるで背を擲せなかわすという仕置。ただその粗忽そこつがあつた時
 ばかりではなく、着物を畳んで背筋を曲げたと云つては折檻せつかん、
 踊がまずいといつては打ぶたれて、体に生なまきず疵の絶間もないのに、
 寒さは骨を通すようなあけ方までも追廻されて、二人が帰ると、
 着物から三味線、下駄のあと始末、夜が明けると帳面をさげて、
 青楼ちややを廻らせられるので、寝る間といつてもおちおちない。

三十

昼は昼で、笛やら、太鼓やら、踊の稽古、手習も一日置で、ほつという間もなかつたのである。

うろ覚えに実の母親は知っていたけれども、年紀も分らねば所も知らず、泣けば舌の尖を捻じられるから、ほろほろ、涙を流しては、といった、蝶吉はその時、崩折れて涙を払った。

土手など通ると、余所の児が母親に手を曳かれて行くのを見た、面白そうに遊んでいるのを見るたびに、同じ人間がなぜだろうと、思わぬ時といつてはない。ある時も、田圃のちよろちよろ水で、五六人、目高を掬つているのを見ると、可羨しさが耐え

られないから、前後あとさきも弁わきまえず、裾すそを引上げて、袂たもとを結ゆわえて、私わたいも遊あそばして下さいな、といなって流ながれに入った。やい、売ばい婦ため、お玉たままじやくし、汚まじやくしらわしい！ と二三さん人、手と足を取とって仰ひつ向けに引ひくりかえしたので、泥水どろみづを飲のんで真ま蒼つさおにななって帰かえると、何条なんじょうこれこを許ゆるすべき、突いきなり然ぜん細紐こまづなでぐるぐるまき巻まき、濡ぬれしよびれたまま高い押入おしりの中に突つ込こまれた。半日はんじつとその夜よの夜中よちゆう二時頃にじごころまで、死しんだものもののようにななつてる中うちに、私わたいばかり、情なさけないものを、辛辛いいものを、慰なぐさめてこそこくれれずとも、売う婦ただといいって突つ転ころがした町まちの奴やつ等ら。

内で芸事げいじをせせたげげるのも、皆手前みんな達が甘あまやかかされて、可愛かわいがらられて、風かぜにもああててず育そだててられた、それほどの果報くわくほうにも飽あき足たりらず、

にきびの出る時分にはその親に泣なを見せて、金を掴つかんで、女をもてあそびに来うせるためだ。蹴飛ばしてやろう、おのれ、見返してやろう、おのれ誑だましてやろう、黓なぶつてやろう、死ぬような目にあわしてやろう。泡を吹かせずにおくものかと、それからには氣はに張はりが出て、稽古事も自分で進み、人には負けぬ氣で苦勞も氣にせず、十七の年とし紀しまで遣やり通したが、堅ついぽも花みになつて、もうあとへ、自分を姉さんといつて冊かしくずのが出来て、秋の仁に和わ賀かにも引ひを取けらず、座敷へ出ても押されぬ一本、地じは清元で、振ふりは花は柳なの免許ひげを取り、生な疵まで鍛なえ上げて、芸うにかけたら何でもよし、客を殺ころす言も句んまで習まい上げた蝶吉だ、さあ来い！

花も見、月も見る癖に、活いきた女を慰なぐさもうとする畜生等、目に

ものを見せてやろう、簪かんざしの先が尖とがつてるから、憎まれて怨まれて、殺されそうになつたらば、対あいて手の目球めだまを突潰つきつぶして、体だけ逃げれば可いいと、柳眉星眼火りゆうびかえんの唇くちばし。満腔まんこうの不平を湛たたえて、かえつて嬌然えんぜんとして天の一方を睨にらむようになり得ると、こはいかに、薄汚うすけがい、耳の遠い、目の赤い、縊ぼろ縊まとを纏まとつた婆さんが杖つえに縋すがつて、よぼよぼと尋ねて来て、生うみの母親が大病である、今生でたつた一目、名残なごりが惜おしみみたいという口上。

夢にも逢あひたい母様おつかさんと、取詰めて手も足も震う身を、その婆さんと別仕立の乗合腕車のりあいぐるま。小石川指ヶ谷町さしやちようの貧乏長屋へ駈着かけつけて、我にもあらず縋おつかさんりついた。母様おつかさん、峰みね（幼名）か、と嬉しさのあまり、呼吸いきの下で声も出た。母親はその日絶えなむとする玉の緒を

蝶吉の手に繋ぎ留められて、一たびは目を開いたが。

一目見廻した様子でも、医師はいうまでもないこと、かざぐすり風薬

の手当も出来ないと見て取つて、何は措いて、蝶吉は一先ひとまず大坂

家に帰つて、後の年期も少いので、上借うわがりをして貢いだけれども、

半日もままならぬ抱妓かかえの身。看病人を頼むのも、医者を中心ける

のも、北里きたと、小石川の及腰およびごし、瘡細やせほそるばかり塩気を断たつて、

いのち生命を縮めてもと念じ明あかした。

狂犬源兵衛

三十一

なぬか
 七日目の朝、ようようのことで抱かかえぬし主から半日の暇いとまを許され、
 再び母親を小石川の荒屋あばらやに見舞うと、三日が間、夜も昼も差込
 み通し、鳩尾みずおちの処へぐツと上げた握にぎりこぶし掌ほどのものが、上へ
 も下へも通らぬので、唇の色も紫になっていたのが、蝶吉の手で
 擦さすられると、恩愛の情に和げられて、すやすやと寝ることが出来
 た。三時間ばかり経つと、病苦も忘れたようになり括くくりまくら枕まくらに胸
 をおさ圧えて起上つた時、蝶吉は生れて以来、しみじみ顔を見たので
 ある。

（よく紀の国屋に肖にていてよ。）

と蝶吉がそう云う顔立、かおだち母親は名を絹といった。

娘を大坂屋に預けて、その身よしちよう蔭町で弘めをしてから、じみ

ちに稼ぎ稼ぎ借金をなし崩し、およそ五年ばかりで身脱みぬけをした、

その間に世話をするものがあつて、自前になつて御神燈を出した

が、可よい抱妓かかえの一人も置いてやろう、と言うものがあつたけれど

も、母親はこれを己おのれかんがに鑑み、たといそうして所得が有つて身代が

出来た処で、汚けがれた金で蝶吉を救すく出しては、きつと末がよくあ

るまい。また二度の勤つとめをしてますます深みへ落ちようも知れず、

もとより抱妓を置く金で仲之町から引取つて手許てもとで稼すうがせる数で

はなし。さればといつて人の深切も、さすがに娘を落籍ひかしてくれ

るまでには到らなかつたが、女腕で一人を過す片かたひま違はに端はした金がね

を積立てても、なかなか蝶吉の体は買取られぬ。たとえばそれが
 出来るにせよ、母はもとより天道の^{おおみこころ}大御心には協^{かな}わぬ生^{おいたち}立、
 自分の体を牲^{にえ}にして、そして神^{かみほとけ}仏^{おやこ}の手で、つまり幽^{ゆうめい}冥の間
 に蝶吉の身を救つてやろう、いずれ母娘が、揃つて泥水稼業とい
 うは、免^{のが}れぬ前^{さき}の世の因縁づく。罪^{つみほろぼし}滅^{あだな}のためだと思つて母親
 の持つた亭主は——間黒源兵衛——渾^{あだな}名^なを狂^{やまいぬ}犬^{いぬ}という、花川戸
 町の裏長屋に住む人入稼業、主に米屋の日傭^{ひようとり}取^とを世話する親^{おやじ}仁^に。
 渡^{わた}者^{もの}を振廻して処々の米屋に稼がしておく、お絹はその賃
 銭を集めに廻つた。橋場今戸の居まわりは云うに及ばず、本所、
 下谷、飛離れて遠くは日本橋あたりまでも、草履穿^{ばき}で駈^{かけ}ずり歩か
 ねばならないのみならず、煮るも、炊くも、水を汲^くむのも、雑巾

がけも、かよわい人の一人手業てわぎで、朝は暗い内に起きねばならず、
 夜になるまで、足を曳摺ひきずつて、日雇ひやといの賃銭を集めて、家うちに帰る
 と親仁の酒の酌をして、灸きゆうの蓋ふたを取換えて、肩腰かたこしを擦さすつて、枕に
 就かせて、それから、歩ぶを取つて、各々めいめい、二階に三人、店に五
 人、入交いれかわりに泊とまりに来る渡者の稼とらぎ高に割当わりあたてて、小遣こづかいを遣やつ
 て、屋根代を入れさせる。この算用そろばんを算盤たばぱちぱち、五を引い
 て二が残り、たった三厘の相違があつても髻たぶさを掴つかんで引摺倒ひきずりたおそ
 うという因業いんごうな旦那を持つてゐるから、夜の更けるまで帳場に坐
 つて、その疲れ果ほつてて吻くちと一息吐つくと綿わたのようになる体で、お絹
 は添そいぶし臥ふしをしたのである。

何の！ 踊の稽古をしても、三味線の弟子を取つても、我身一

ツは安々と世間を清く過さるるを、獄に投ぜられて苦役に就いても、さばかりにはあらずと思う、ほとんど生身を削り落すような難行をしたのは、あえて墮地獄だじごくの我身の苦患くげんを扶たすかろうというのではない、ただ単ひとえに蝶吉のためにしたのであつたと、母親がその時の物語。

三十二

もとより自ら進んでも、かくはなるべき運命であつたらうけれども、さまでとはさすがに思い懸けなかつた、積年の憂苦辛酸、一日じつの安いとまき暇いとまもないので、お絹は身も心も疲れ果てて、その一月

ばかり前から煩い出し、床に就いて足腰の自由が利かなくなると、
 夫やまいぬ狂犬源兵衛は屋外にこれを追出した。それを争う力もなくて、
 指かたす方もなく便たよつたのが、この耳うとの疎い目腐れの婆ばばの家うち、この年と
しより寄この児は、かつて米こめつき搗ことなつて源兵衛が手に懸かかつて、自然お
 絹の世話にもなつたが、不心得な、明巢あきすねらい覗ので上げられて、今苦
 役中なので、その以前せがれから悴せがれの縁で、お絹なきけにも厚意を受けた。年
 寄は恩を忘れず家うちへ引取つて介抱かいぼうをしてはいるけれども、活計たつきに
 窮するのはいうまでもない上に、耳が遠くツて用が足りず、水一
 杯まいといつても聞えない看護みとりを請うけるお絹の身になつたらどうであ
 つたらう、またこれを知りつつも、一晩と附切つて介抱すること
 のならなかつた蝶吉の気はどんなであつた？ 人が神かみほとけ仏ほとけを怨うら

むのは正にそういう時である。

そちこちする中、^{うち}昼も過ぎたので、年寄はまめまめしく形^{かた}ばかりの膳立^{ぜんだて}をした、お菜^{かず}がその時目刺に油揚^{あぶらげ}。

（母^{おつか}さんが烘^{あぶ}つて上げよう、）と、お絹は一世の思^{おも}出^{いで}。知^ち死^し期^ごは不思議のいい目を見せて、たよたよとして火鉢に凭^よつた。夏近^{なつちか}いが、寒いからと、年寄^{あやぶ}は危^{あや}んで、背後^{うしろ}から昆布^{こんぷ}のような蒲団^{ふとん}を被^きせようとすると、これ^{これ}じゃあ汚^{きた}らしくツつて折角^{せつかく}の馳走^{ちそう}も旨^{おい}しゆうないと、取^とつて撥退^{はねの}けたので、蝶吉^{てつきち}が心得^{こころえ}て、被^かていた羽織^{はねおり}を脱^だいで着^きせた。

（じみなんですから母^{おつか}さん似合^{にあ}いますよ、）と嬉^{うれ}しそうにいう顔^{かほ}を視^{なが}めながら、お絹は手を通^{とお}しつつ振沢^{ふり}山^{やま}な裏^{うら}と表^{おもて}を熟^{じつ}と見て、

（峰ちゃん、生意気なものを着てるね、）といった。故郷ふるさとの京の色香に江戸の意気張いきばりを持って、仲之町でも、葭町でも、小さんといつて、立てられた蝶吉の母は年とし紀わずかに三十三、最後の大厄で、その日の晩方、男は自分で見立てると言つて遺言して、日本日本の男と女の中に、しかも、廓くわくの中に、蝶吉ばかりを残したのである。あと十日とは措おかないで、小石川柳町から丸山の窪地くぼちへ水が出た時、荷車が流れたのが、根太ねだへ打ぶつかつて、床を壊すと、件くだんの婆は溺れて死んだ。これも葬る者がないので、蝶吉は母が臨終に世話になつたのを恩として、同じ寺に葬つたのである。

印の墓石はいまだ立てることは出来ないけれども、出来る時だけは欠かさないで参詣さんけいする、梓がなかつた以前さきは、ただその墓

に取とり継することばかりがこの上もないたのし楽しみであつた。

蝶吉はその亡きお絹の引合せだと信じている梓に、いつの晩か手を開いて見せた。指の先が色に染まつて、赤くなつて血が浸にじんだようなのを怪あやしんで聞くと、今日お墓参りをした時濡れ手で線香を持つたといつて、

(私わたくし母おつかさんと御膳を食べたのは生れてからたつた一度なんですもの、)と継り着いて泣いた。その手が冷たかつたから、梓は思わず、しつかと胸に抱いたのである。

(お宗旨は何だ。)

(知りません。)

(問えば可いいじゃあないか。)

(だって可笑しいわ。)

(じゃあ何てツて拝むんだな。)

(一生懸命に南無阿弥陀仏。)

この女が、この体で、この姿で、ただ一人墓の前に泣くのだと思つて、梓は抱いたまま放さなかつた。

三十三

「よ、どうしてそれが見棄てられるものか、まだその上に蝶吉は子供の時から、怨と、僻と憤とをもつて見た世に対して、謂わば復讐的に己が腕で幾多遊冶郎を活殺して、その肉を啖い、

その血を嘗むることをもつて、精魂の痛苦を癒そうとしたが、あたかも母の死に逢つて志を果さず、まだ一たびも男に向つて、誑すの颯るのというはもとより、お世辞一ツ言わずにいた身をもつて、これを梓に献じたのである。譬えば、その家は壊たれ、その樹は伐られ、その海は干され、その山は崩され、その民は屠られ、その女は姦せられた亡国の公主にして、復讐の企図を懐いて、薪胆の苦を嘗め尽したのが、張も忘れ、意気地も棄ててかえつて我に哀を請い、一片の同情を求むるのである。天下またかくのごとく憐むべく悼むべきものはあるまい。何としてそれが見棄てられよう。蝶吉は残少になつた年期に借り足して、母親を見送つてからは、世に便なく、心細さの余、ちと棄身になつて、日頃から

少しは飲いけた口のますます酒量を増して、ある時も青楼ちややの座敷で
 酔よつた帰りに、夜更けて京町の夜露の上に寝倒れた。月が射さして、
 その肉は蒼あおく、その骨は白く見ゆるまで、冷えて霜を浴びたよう
 になつたのを、往來ゆききの仕事師が見附けて、大坂屋へ抱え込こむと、
 気が付いたが、急に胸むな前さきへ差込さしこみが来てから、持病になつて、
 三日置ぐらいには苦くる悶しみもたえる、最後にはあまり苦痛はげが烈はげしいの
 で、くいしばつても悲鳴もが洩もれて、畳を搔かむしつて転げ廻るのを、
 可煩うるさいと、抱かかえぬし主ぬしが手足を縛むすつて、口くちに手て拭ぬぐいを捻ねじ込んだ上、
 気つけだと言つて、足袋を脱がせて、足の拇お指ゆびの間へ続け様に
 灸あを据えた。妙としごろ齡ころになつてから、火ぶくれの痕あとは、今も鮮あざ明やか
 に残つてると、蝶吉は口惜しそうに、母親に甘えるごとく、肩を

振つて、浴衣に搦からんで足を揃えて、小さい爪つまさき尖を見せながら、目に涙を浮うかべたその目で、待合の襖ふすまの紙が蟹かにのような形に破れてい
 るのを見付けると延のばした足の拇指を曲げて、件の破くだん目やぶれめを、
 （繕つくろったら可よさそうなものね、何だい、何だい、）と叱るように
 いつて抉えぐるのを、

（馬鹿な、）と叱りつける梓の顔、鼻を詰つまらせながら、涙の目で、
 蝶吉は嬉しそうに瞞みづめていた。それをも梓は忘れはせぬ。そんな
 他愛のない、取とり留とめのない、しかも便たよりのない孤みなしごに、ただ一筋に
 便たよらるる、梓はどうして棄てられよう。

蝶吉はかの時無慙むざんなる介抱かいぼうをした抱主の処置たいちかに平なることあた
 わず、圧おさえ切れない虫は突つツ走ばしって、さてこそ天神下の口入宿へ

来たのであつた。柳橋か、よしちよう 葭町かと行先を選んでいる中に、
 内々勧めるものがあつた。これは天下の秘密だけれども、かみゆい 髪結
 が一人、お針が二人、料理人が一人、医師が一人、女を十二人選
 んで、世話役が三人これを頭取が率いてパリイとかシカゴとかい
 う処の、博覧会へ日本の女を見せに行く。ゆ 場所もばら 薔薇の花の盛な
 中へ取つて、しゆぬり 朱塗のうち 埴も結つてある、日給は一日三円、十月の
とつき 約束でどうだという。どの道東京で死んだ処で、誰一人そうかと
 も言つてくれない体だからと、既にみせもの 観世物になる処、湯屋の前で
 ふつと見た梓に未練が残つたので、ようようけだもの 獣にのし 楽まれるだけ助
 かつたのである。その話をする時も、蝶吉は坐つたまま、大手を
 振つて、

(こうやって威張って見せてやろうと思つたのよ。)

梓は余りのことに吹出して、

(シヤモの牝はこれでございとやあしはないか、)

(まずね、)と莞爾にっこりした暢氣のんきさ加減、浅はかさも程があつた。

「僕が附いていない日には、お蝶、お前どんな目に逢おうも知れぬ、」と梓は息を吐つきもあえず、

「それさえ見棄てて、別れなければならぬような、児こを墮おろすなどという、飛んだことをしてくれた。」と蝶吉うなじの項うなじを抱かいて口移かしに噛かんで含めるように、自分の赤まごころ心を語るため、今まで久しい間、時に触れ、折に当つて、動かされた、至憐至愛の情の切なるを、ここに打明けて語つたのである。

蝶吉は聞くこと半ばにして、色を変えて、心、その心を貫くご
 とに、ほとんど顔を見らるるに耐えざるごとく、摺^{すりぬ}抜けて駈^{かけだ}出し
 もしかねない様子に見え、左に、右に、その面^{おもて}を背けたが、梓の
 手と、声と、語^{ことば}と、真心は、ますます力が籠^{こも}つたから、身も世も
 あらず、動きもならずいうこと、ここに到^こる頃^{ころ}いの、果^{はて}は、悄^{しやう}
 然^{ぜん}と頭^{かしら}を低^たれて、腕^{かひな}に落^おした前髪^{まへかみ}がひやりとしたので、手折^{たお}つ
 た女^{おみなえし}郎^{はかな}花^{はな}の夢^{ゆめ}い露^{つゆ}を、憂^{うれ}き世^よの風^{かぜ}が心^{こころ}なく、吹^ふ散^ちすかと、胸^{むね}
 に応^{こた}える。

三十四

「僕だつて最初はじめからこういう間の中といつちやあ、末始終すえしじゆうはきつと泣なを見なければならぬと思ふから、今度こそ別れるような話にしようか、今度こそと、その度に悄しおれちやあここへ来ると、何かしらお前に言われること、されることが、一々思ひの増すよくなことばかり。私はもう一服しびれぐすりずつ痺しびれぐすり薬を飲まされるようだった。

今じゃ家うちにも居られなくつて、谷中ひっこに引込むようになった上は、どうせ破れかぶれだから、人が何と云つたつて、世間も義理も構うことはない、お前とどうぞしてという覚悟きを極めた処へ飛んだことを聞いてしまった。

お蝶さん、お前は訳が分らないから、何にも世の中のことは知

るまいがね、およそ墮胎だたいということをした者は、これが罪とも恥
 とも知らないでした事にしろ、心は腐つても、人間という目鼻だ
 けの、せめて皮でも被かぶつてる中は、二人ふたり並ならんじやあ居られやしな
 い。こう言えば水臭いと、きつと私を怨うらむだろうが、いつも言う
 通り、お前のような稼業かせぎをしている者とは、兄弟であつたり従いと姉
 妹こであつたりした上に、皆みんなにたんと世話にもなつた。どういふ因
 縁きだか、お前にも恩を被かた私だから、訳は分つてる、こう見えて
 も可はず愧かしいが、馬車に乗のつたこともあるし、御前ごぜん様々さまと畏かしこら
 れたこともあるが、大おおき声こゑ一つ出してお前にやあ、用を言い付け
 たこともない。あんまり大人しくつて、頼たのりがないから、私は何
 だか物足りない、きりツとして叱のつてくれ、癩かんしやく癩やくを起して横

顔の一寸も撲なぐられたいと、芸妓げいしやのお前にいつも言われた、男が一人そのくらいに惚ほれたら可よかろう。故郷とは始終たより便をして、人のおもちやになつてゐる女に、姉上々と書いたから、ああこんなことをするような身分ではないと知りながら、お前の手紙が来れば、様づけにして返事を出した、何も機嫌を取つた訳でもなし、取入つて色男になろうと思つたのでもない。

うわべはどうでも、理窟は知つても、小児こどもの内からの為来しきたりで、本ほん当に友達とんぱちのようにも思ひ、世話になつたとも思う上に、可愛ふびんい、不便だと思ふから、前あ後とも考えなかつた。

お前を立派な女だ、姫ひい様さまだ、女房おかみさんだと心しんから思つてしたことだよ。僕はお世辞も何にも言わない。女は氏こしなくして玉の輿こし

だから、どんな身分の人に姉さんといわれなくても限らぬが、そりや男の方から心を取って惚れさせようとか、気に入られようとかして、後じゃあ玩おもちゃ弄やにするためだ。

可い餌えさをかって肥えさしてしめて食べようという、鴨かもと同じ訳じゃあないか。これが遊あそび人びにんとか、町内の若い衆とかいうなら知らず、ちったあ身分もあるものに本当に惚げれられた芸げい妓しやといつちやあ、まあ、お前一人だろうよ。

それを思おも出いにして、後生だから断念あきらめておくれ。神月は私の良てい人しゆだったと、人にいっても差支さしえはない。そして謂いうに謂いわれない仔細しさいがあつて別れたといつて御覽、お前の恥ちにやあならないから、よ、解わかつたかい。

いまにももう少し年とし紀でも取つて、ちつたあ分別がついて来ると、成程無理はなかつたと、自分のしたことに気が付いて私の心も知れるから、体だけ大事にしてかるはずみ軽忽をしないで辛抱しな。別れるといつて見棄てやしない、蔭じやあどこまでも思っている、」と神月もほろりとした。蝶吉は死んだ者のようである。

三十五

「悪いことはいわないから、その綿の入らないものを威張つて着るのと、いつもいうことだけれど、これから暑くなつて、氷の打ぶつつかきま欠まをまんま飯まにかけて食べるのと、それから無理酒を飲むのは止よせ、

よ、気を付けなけりや、お前今年は大厄だ。」

としめやかに言つたがふと心付いて、手を弛めた、

「酔醒えいざめか。寒くはないか。」

「いいえ、」と内端うちわに小さな声で、ものを考えるがごとく蝶吉は
 いった。

「そうか、また冷えると悪いぜ。」

「ええ。」と仇気あどけなく秘かくさず、打明けて縫すがり着くような返事をす
 る。梓はこの声を聞くと一ひとしお入思入つて、あわれにいとおしくな
 るのが例で。

「体はもうすつかり良いのかい、」

「ええ、」

「お前は駄々ツ子で、鼻ツ端が強くつて、威勢よく暴れるけれど、その実大の弱虫なんだから心配だよ、この頃は内で姐さんと喧嘩はしないか。」

「ふふ、」と泣出しそうにしながら、蝶吉は無理に片頬で微笑む。

「やっぱり母様の夢ばかり見てるのか。」

「ええ、」ともいわず蝶吉は面を背けると、御所車の簾の青い裏

に、燃立つような緋縮緬を、手に搦んで、引出して、目を拭つ

て、

「何にも言わないで下さいな、胸が一杯になつて来てよ、可笑しいねえ、」といって袖口を除けたが、ぱつちりと目を睜いて、梓を見まいとするかのごとく、あらぬ方を瞋めたけれども、

「おやおや、可けないねえ。」

また俯向うつむいて目を塞ふさいで、

「貴方あなた、手を放して下さいな、」

声も消入るようであつた。

梓はともかくも蝶吉の心の落着いているのが知れて、いうままに手を放したが、ほとんど失心しているような女の体は、そのまま背後うしろへ倒れるだろうと思つた。

蝶吉は、かえつて、ちゃんとして、膝に両手を組みながら、恍うつり惚して梓の顔を見ていたが、細い声で、

「あなた、」

「どうしたの、」

「後生だから顔を見ないで下さいな。」

梓は思わず面おもてを背けた、火鉢の火は消えかかつて籠かご洋燈ランブの光も暗い、と見ると瘦やせた薄すすきと、悄しおれた女おみなえし郎花しと、桔き梗きようとが咲乱れて、黒雲空に、月は傾いて照らさんとも見ええず、あわれに描いた秋草の二枚折の屏びようぶ風が立っているのが、薄暗あかりい灯で、幻のようで、もの寂しい。

「私わたい泣なくんだから、あつちを向いても可よくツて？」

梓は頭つむりから寒くなつたが、俯向うなずいて頷くと、蝶吉は向むこむきになつて屏風びんぷうに影が映つた、その胸をしつかり抱いた。

着物の振ふりが両方から、はらりと迫つて、身も瘦せた。細々とした指さきの尖さきが、肩から見えて、潰つぶし島田の乱れかかったのを、ふら

ふらとさして熟じっとしていたが、折れたように身を倒す、姿はしぼんだごとくになり、声を殺してわつと泣いた。梓も耐たまらず、背向そがいになった。二人の茫ぼんやり然なりした薄い姿は、件くだんの秋草の中へ入つて、風もないのに動いたと見ると、一人は畳へ、一人は壁へ、座敷の影が別れたのである。

半札の円輔

三十六

「さて早や、」と云う懸かけ声こゑで大和家の格子戸を開けて入る、三遊派の落語家はなしかに円輔えんすけとて、都合に依れば座敷で真を切り、都合に依れば寄席よせで真を打つ好男子。但しこの男が真の時は必ず御定連へ半札はんふだを出す例であるから、通称は半札の円公。鈴本が刎はねてあいにく繰込のお供つかまつも仕らず、御酒頂ちやうだい戴いも致されず、家へ帰いもとつて妹じや間に合あはずといふので、近所だから大和家へ寄ることちよいちよい。さてはや半札の円公は、御神燈の下から、まず御お馴染なじみの顔がんしよく色いろを御覧に入れますると、

「よう！」と長火鉢の前から奇な声を発して応じたものあり。内の姐ねえさんか、あらず、傭やといの婆さんか、あらず、お茶を碾ひいてる抱か妓かえか、あらず、猫か、あらず。あらず。あらず。湯島天神なかせか中坂

下したの松の鮎すしの悴源せがれちゃんである。この男錢を遣わずに女の子と
 遊ぶのをもつて、通と悟つたから耐たまらない。数寄屋町の御神燈の
 下を潜くぐる事、毎夜あたかも燕つばめのごとしで、殊にこの大和家には、
 蝶吉という、野郎首ツたけの女が居るから、その取入ること一ひとつ
 通おりではなく、余所よその障子を張つてやりの筆法で芸げい妓しやの用達ようたし
 から傭やとい婆ばばの手助てだすけまでする上に、隙ひまな時は長火鉢の前で飼猫
 の毛を梳すいている。運が好よいと、雛おしやく妓くの袖を引張ひっぱることも出来
 るし、女中の臀しりを叩くことも出来るのが役得。蝶吉に肱ひ鉄砲てつぱうを食
 ツて、鳶頭かしらに懐中の駒下駄を焼かれた上、人の妓こどもを食おうとする、
 獅子身中の虫だとあつて、内の姉御あねごに御勘氣を蒙こうむつたのを、平蜘蛛ひらこも
 蛛くもで詫わびを入れて、以来きつと心得なにとぞまするで、何卒相変りませず、

今夜も来ている。

あいにく抱妓かかえどもは皆出を勤めて居おらず、女中は忙せわしいし、姉御は用達にお出懸けなり、火鉢の灰は綺麗だし、注さす後から鉄瓶の湯は煮立つので、色男余あまりの所作なさに、猫を撫なでたり、擦さすったり、どうしたなどと、言つて見たり、耳を引張ひっぱったり、髯ひげの数を数えたり、様々に扱うと、畜生とて黙つておらず、ニヤアと一声みぶるい身顫みぶるいをして駈出かけだそうとするのを、逃がしてなるか、と引抱ひっかかえて、首環くびだまに噛かじり着いて、頬杖して、ふと思おもい着いて、「恩愛雪ちもらいの乳貫」という気取きどり、わざと浮かぬ面つらをしている処へ、件くだんの半札がさして早であつた。

「師匠上りたまえ。ようこそ、」と諸事内の人で挨拶する。

ぐツと呑込のみこんで、円輔はあたりをみまわし、

「へへえ、成程なる、あいにく出懸けまして御愛想もございませぬがね、どこへ、姐さんは。」

「また、これだそうさ、」といつて窪くぼんだ顔の真中まんなかへ指ゆびをした、近眼鏡の輪を真直まつすぐに切つて、指が一本。何と気を変えたか、宗匠、今夜は大いにいな使つて、印半纏しるしばんてんに三尺帯、但ししゅちん縹たのばいれ入ぞうげに象牙の筒で、内々そのお人ひとがら品な処を見せてござる。

円輔は細長い膝こもんちりめんを小紋縮緬うすつの薄にまいがさねぺらな二枚襲てのひらの上から、掌てのひらですらりと膝ひざがしら頭さすへ擦り落すこと三度にして、がツくりと俯向うつむき、

「さてはや。」

三十七

「どうしました、大分落胆の気味だね、新情婦しんいろも出来ませんか。」
と源次郎は三味線の挂かかつた柱むちに凭もたれて澄すましている。

円輔はまた耳みみたぶ朶たぶへ掛かけて頬ほっぺた辺へたを扱こき上げて、

「いや、まず、はははは、時に何は、君の落おつこちはどうしたんでげす、お座敷かね。」

「何ちつと、遠方とんぱつだそうですね。」

「ははあ、遠出とんしゅでげすかい、なにかに就つけてさぞ氣きが揉もめるこつてえしよう、よ、色男いろおとこ。」と浮うわツ調子ていしで臀しりをぐいと突くと、尋常じんじょう

に股を窄めて、

「止よせてえに、これ、詰つまらないことを、何だ。こう見えても苦
 労があるんだから、ねえ、おい。」と甘ツたるい。

「よ、苦労！」

と仰々しく手を支ついて、ぐツと反つて、

「来ましたね、隊長、恐おそれい入いったね、どうも。苦労と来たね、畜
 生、奢おごりたまえ、奢おごりたまえ。」

「いずれ帰かえつたら奢おごらせることに致いたしましょうよ。」と北叟ほくそえみ笑
 をする。

「これは！」

「いや、師匠、串じょうだん戲だんは止とめて、蝶吉てつきちが帰かえりさえすりや、是

非その御一統が一杯ありつこうという寸法があるんでさ。ごくごく吝嗇けちに行つた処で、鰻うなぎか鳥ね、中な処が岡政で小ぎつぱり、但しぐつと発奮はげんで伊予紋となろうも知れず、私わつしや鮪屋だ！ 甘いものは本人が行けず、いずれそこいらだ、まあ、待つていたまえ。

「たしか確に、」

「ええ、しつか確りだ。」

「えら豪い！」と大声を張上げて、ぴたりと、あたま天窗を下げたが、ちやんと極きまつて、

「さてどつちです、こうなると待遠しい。」

「八丁堀だそうだ。」

「成程御遠方だ。幾時頃から、」

「おととい昨日の晩から行きツ切り、おなじく、」と鼻を指して、「ね、さつき使が来て、今夜は遅くとも帰るツていうんだ、ねえ、升どん。」

勝手から女中の声で、

「はあ、」

「ねえ、おい、富ちゃん。」

次の部屋の真中で、盆に向つて、飯鉢と茶の土瓶を引寄せて、
 こなたあかり此方の灯を頼りにして、幼子が独り飯食う秋の暮、という形で、
 か搔つ込んでいた、あわれ雛妓が、
 「ええ、」と答えてがツくりと飲む。

「確か^{たしか}い。」

「きつとでございますつて。」

「占めた！」という時からからと戸が開いた^あ。

円輔は振返つて、

「や、御帰館！」と喚^{わめ}いて、座を開いて、くるりと向く。

源次はぬうと首を伸ばして、

「誰だい、」

「蝶吉姐さんだよ、誰だたあ何のこツた。」

「そう、」といつて源次は猫を落して坐り直つた。

蝶吉は何か悄^{しよんぼり}然として帰つて来たが、髪も乱れて、顔の色

も茫然^{ぼんやり}している。前垂懸^{まえだれがけ}で縷子^{しゆす}の帯、唐棧^{とうざん}の半纏^{はんてん}を着た

平生ふだんの服装なりで、引詰ひつつめた銀杏いちょう返がえし、年紀としも老けて見え、頬やも瘦やせて見えたが、もの淋しみしそうに入いって脇目ふも触ふらず、あたりの人ひとには目も懸かけないで、二階すまへ澄すまして上あろうとするのを、円輔みづが瞋みづめて、ちつと当あての違ちがつたという形かたちで、変かに生真きまじ面目めいに、

「お帰かえんなさい。」

「唯ただ今いま、」と言いつたばかり、つんとしてトン、トン、トン。

三十八

「御機嫌ごきげん麗うわしからずじやあないか。顔色おそろが可恐おそろしく悪いわるいぜ、花はな札だが走はつたと見える、御馳走ごちそうはお流れか、」と円輔みづはてかてかし

た額を撫でた。

「いえ、師匠、御馳走はその勝負にやあ寄らないんだ。但し御機嫌の悪いのはこの節しよつちゆうさ、
心ところてん太の拍子木じゃあないが、からぶりぶりしてらあな。」

「やつぱり……。」「と押えて、それか、と呑み込んだようにいうと、源次は黙うなずつて頷く。

声を低うして、

「何でげすかい、あの神月とやらいう先生に一件が知れて、先方むこうから突出したというのは本当なんで？」

「ああ、」と何だか聴きたくもなさそうに、源次郎は乗らない返事。

「成程なら竝べて置けば雛ひな一対というのだが、身分には段があるね。学士と謂いやあお前さん、大したもんでげしよう。その上に華族の婿様だというじゃありませんか、幾ら若い同志で惚ほれ合つたつて、お前さん、その身分で芸妓げいしやに懸かり合つて屋敷も出たツてえから、世の中にやべら棒もあつたもんだ。それだから円輔も大学へ入る処をさらりと止よして、落語家はなしかとなつたような訳だと、思つたんでげすが、いや、世の中へ顔出しも出来なくなつた処で、子おろを墮おろしたと聞いて、すつぱり縁を切つたなあさすがに豪えらいや、へん、猪口ちよこの受取りようを知らねえような二才でも、学問をした奴やつあかなめ要が利かあ、大したもんだね、して見ると蝶さんが惚ほれたものおとこぶり男おとこぶり 振おとこぶりばかりじゃあないと見える、縊よりが戻りそうでもありません

んかい。」

「どうして、ちつとでも脈がある内に鬱ふさぐような女じゃあないんだ、きやツきやツて騒さわがあね。」

「成程、して見るとこちとら一味徒党。色情事いろごに孕はらむなあ野暮の骨頂だ、ぽてと来るとお座がさめる、墓ひきの食傷がえるじゃあねえが、お産はらの時は腸はらわたがぶら下りさがまさ、口でいつてさえ粹いきでねえね、芸妓げいしやが孕はらんで可いいものか悪いものか、まず音羽屋おとわやに聞いてもらいたいなんてツて、あの女こが、他愛のない処へ付け込んで、おひやり上げて、一服承知させた連中、残らず、こりや怨うらまれそうなのツてげす。何を目当あてに、御馳走ごちそうなんぞ、へん下らない。」

と円輔はまた落胆がっかり、源次は落着き澄すまして、

「師匠心配したもうなツてえのに、疑り深いな。」

「だつてあの御気色みけしきを御覧ごろうじろ、きつとあれだ、違ちげえねえね、八

丁堀ふだで花札ふだが走つた上に、怨み重なる支チャン 那チャンと来ちやあ、こり

や奢おごられツこなし。」

「勿論僕わたくしの、その御相伴ごばんなんだよ。」

「へ、君だつてあんまり、奢おごられる風かぜじゃありますまいぜ。」

「ズツと有る、有るね、そこあ憚はばかりながら源げんちやん方寸ほうすんにありさ

。」

「じゃあ一番ひとつお手形てがたを頂いただききたいね。」と円輔えんすけは詰寄ちぎつた。

「手形てがた宜よろしい。当てが違ちがえば、師匠しせう、どうだ、これを献上けんじやうは。へ

へ、詰つまらねえもんだけれど。」

と少し見せたたくもあつて件のくだん 葎たばこ 入いれを抜く。円輔は打返して捻ひねツて、

「罷まり間違あやえば、手前にこのお腰こしのもの、ちよいと武士に二言はなしかね。」

「いや、江戸こッ児こだ。」と誰かの声こわいろ色いろで、判きつ然ぱりとなる。

「豪ごうい？」と大声で、ぴたりとお辞儀をした、円輔は驚いて顔を上げる。

二階から蝶吉の声で、

「富ふうちちゃん！ 富ふうちちゃん。」

犬張子

三十九

「はい。」と引張ひっぱつて返事をして、雛妓おしやくは膳ぜんを摺ずらして立ち、
 段階だんばしご子ごの下で顔を傾けて、可愛らしく、

「何、姐ねえさん。」

「あのね、私わたいは今夜塩梅あんばいが悪いから、どこから懸かかつて来てもお座敷みんなは皆断みななつて下さいな、そして姐さんがお帰りだったら済みませんがお先へ臥ふせりましたッてね。」

「はい。」

「可い
可い
可い。」

蝶吉は、帰るとその時まで何をすることもなく可厭いやな心持で、箆たのんす前にぼんやり立っていたのであった。

雛妓に言付けて、座敷を斜ななめに切つて、上口あがりくちから箆ひっかの前へ引返えすと、一番目の抽斗ひきだしが半ば開あいていた。蝶吉は衝つと立つつて、

「おやおや、私わたいが開あけたのか知ら、」

と思おもい寄よらず眩くらいた。抽斗つぶやには、神月の写真をいつも立て掛かけておくのである。

ふツつり切られてしまつてからは、人は見なくツても、神月は知らないことでも、蝶吉は何となく、その写真を見ることさえ、我身まで儘ままならぬようはかなで儂あだいので、あえて、今は仇あだなれと、俣しのおもぶ思

の増すのが辛さに、おもかげ 倂を見まいとするのでない、身あやまちに過失があつて、縁切つたと言われた人の、たといその姿でも、見てはならないようにされたごとく感じてゐる。

抽斗の縁に手を掛けて、ためら 猶予いながら、伸上るようにして恐こわいものように差さ覗しのぞこうとして目を塞ふさいだ。がツくり支おえるように抽斗を差し懸けて、ああこの写真から下げて来ちや旨おいしいものを食べたつけど、耐たまらなくなつて、此方こなたを向くと、背中せなかでとんと閉しまつた途端に、魂を抜去られたか、我にもあらず、両手で顔を隠して、俯うつむ向いて、そのまま泣いていた。

しばらくして、蘇よみがえ生なまつたもののように、顔を上げる。

むこう 向の隅に、ひな 雛のびようぶ 屏風の、かいま 小さな二枚折の蔭から、友染の搔

卷まきの裾すそが洩もれて、灯ともに風も当たらず寂せき莫ばくとしてもものの寂さびしく華は
 美でな死し体たいが臥ねているのは、蝶か吉かずが冊かく人形にんぎょうである。搔か卷まきはいつも
 神月かみづきと添ご寝しよした五ご所じよ車くるまを染なめた長なが襦じゆ袷ばんを裁たつたのに、紅も絹みの
 裏うらを附つけて、藤ちり色めん縮す緬まわの裾すそ廻まわし、綿わたも新あたらしいのをふつかりと
 入いれて、天びろ鵝うど絨じゆの襟えりを掛かけて、黄わう八ぱつ丈ちゆうの蒲ふ団とんを二ふた枚まい。畳たたみを六むツに
 仕し切きつたほどの処ところへ、その屏びん風ふう、その枕まくら、小こさく揃そろえて寝ねかした
 上うへの、天てん井いには犬いぬ張はり子この、見み事こと大おほきななのが四よつ足あしをぶら下げて
 動うごきもせず、一いっ体たい遣やりつ放はなしのお侠きやんで、自じ転てん車くるまにのりたがつても、
 人形にんぎょうなどは持もつてもみようと思おもわない質たちであつたのが、児こを墮おろし
 たために神月かみづきとの縁えりが切きれて、因果いんぐわを含められた時とき始はじめて罪つみを知し
 っつて、言いわれたことを得え心しんしてから、縁えりなればこそ折せ角かく腹はらに宿とどつ

たものを、闇やみから闇へ遣つた児に、やがて追い着いて手を引くま
 で、詫わびをする氣でこうしている。あたかも活いきたるものを愛する
 ごとく、起きると着物を着更きかえさせる。抱かいて風車かざぐるまを見せる
 やら、懐ふところ中へ入れて小さな乳を押しおっつけるやら、枕まくらを竝ならべて寝て
 みるやら、余所目よそめにはまるで狂きちがい氣。

四十

「ああ、天窓あたまが重い、胸が痛い、体中がふらふらする、もう寝よ
 うや、」

蝶吉は枕まくらを竝ならべて、着たまま横よこになつて裾すそを伸ばして、爪先つまさき

を包くるんだが、玉のような腕かいなを人形の搔かい卷まきの上へ投げ掛けて、ぴつたり寄つて頬を差寄せ、

「坊や、ちよいと、どうしたの、お母つかちゃんは可いけなくツてよ、すつかりお花を引いて負けて来たわ。二晩ちつとも寝ないんだもの、天窓が割れるようなの、悪いわねえ、穴蔵ン中でお前、六人一座でさ、灯あかりは点つけ通しだし、息が苦しくなると、そこらへ酔を打つわたいのよ。私わたいはもう死ぬようだ。お前のお父とつちゃんに叱なられてから、お花なんざ引くまいと思つて、水も沸わかしたんでなくツちや飲まないでいたけれども、お母つかちゃんはお暇いとまが出たんですもの、体を大事にしたつて詰つまらなくなつてよ。だから、最初はじめツから、お前さんに棄てられると、私わたいはどうなるか知れないツて、始終しじういつて

いたのにき、打遣うちやつてしまつてき、そして軽かるはずみ忽いきなりなことをするなツて言つてくれたつて私わたいは知りません。天窗へぴんと来るような五円花でも引かなくツちやあ、自分で生きてるのか何だか分らないもの。

だけでもねえ、身でも投げて死んじまうと、さも面つら当あてにしたようで、どんなに心配を懸けるか知れないし、愛想を尽かさされると、死んでからも添われないと悪いから。何も私わたいを厭いやなんじやない、世間の義理だからつて言うんだけれども、何だか自分勝手のようだわねえ。

どうせ早く死にたいんだから、何だつて、構やしない。坊や、お前でも生きてるなら可いいけれど、目ばツかりぱちぱちしていて、

何にも言わないんだもの、張はり合あいも何にもありやしない。私わたいも死しんじまつたら、死んだものと、死んだものとだから、お前も口を利くだろう。少しも分らないでした事だから、堪忍することはするツて、お父とつちゃんもそうお言いだから、坊や、お前も酷ひどいことをされて、鬼おにとも蛇じゃとも思つてようけれど、堪忍して、母かあちゃんと言つて頂戴な。」

と摺すり着ついたが、ガツくり仰あおむ向き、薄ともしびい燈とも火しびに手を翳かざして見た。「おやおや、瘦やせたわねえ。徹よど夜おしをして、湯にも何にも入らないから、黒くなつたよ、段々瘦せて消えれば可いな。」

と袖口を掴つかんで肩あたりの辺なまで、撫なで下げると、上へ伸ばしていた着物は飜ひつて、二の腕もあらわになつた。柔やわ肌はだに食い入るばか

り、金金具かなぐで留めた天鵝絨びろうどの腕守うでまもり、内証で神月の頭字かしらじ一字、神というのが彫つてある。

蝶吉は清すずしい目をぱつちりと睜みはつて、恍惚うっとりとなつたが、枕を上げると突いきなり然忘れたように食い付いた。腕守を嚙かんで、頭かしらを振つて、髪を揺ゆぶり、

「厭わたいよ、私わたい厭わたいよ、別れるのは厭、厭！ 厭だ、厭だ、別れるのは厭。」と、泣吃逆ないじやくりをして、身を顫ふるわし、

「写真くらい見たつて、可いじゃないかね、可いけないかい、ええ、構かまうもんか。私わたいはもう、」

むツくり起上ろうとすると、茫ぼんやり然犬張子が目に着いた。

「はッ、」という溜息ためいきで、またばったり枕に就いたが、舌打を

して、

「寝ツちまえ！」

とすが縫り寄り、

「わたい私も端の方へ入つてよ、坊や、さあ、お乳。」

といつて、見得もなく、懐をかいあ搔開けて、ふツくり白いのを持ち添えて、と見ると、人形の顔はふツと消えて無かつたのである。

胸騒

「おや、おかしいねえ、」と吃驚して屹となったが、蝶吉は出がけに人形の顔を搔卷かいまきの襟で隠しておいたのに気が付いた。

「まあ、さつきから顔が見えたようだっけ、それじゃあ、倅おもかげだつたかしら。」

思わず悚然ぞっぞっとして、あたりを見たが、莞爾にっこりして、

「ちよいと、肖にていると思うもんだから、お前は生意気だね。」

といつて搔卷の上を軽く叩くと、ふわりと手が沈んで応こたえがない。

「あれ、」とばかりで、考えたが、そツと襟を取つて、恐々こわこわ搔卷を上げて見ると、牡丹ぼたんのように裏が返つた、敷蒲団しきぶとんとの間には、紙一枚も無いのである。

蝶吉は我知らず、

「富ふうちゃん、」と声を立てて、真直まっすぐに跳は起きた。

「はてな、」机こに凭よりかかった胸を正しく、読よんでた雨月物語から目を放して、座の一方を見たのは、谷中瑞林寺ざいりんじの一い間に寓ぐうする、学士神月梓である。

衣帯正しく端然として膝に手を支ついて熟じつとももの思いに沈しんだが、借かりものの経机きょうこを傍そばに引ひつけてある上から、そのむかしななにがしでん殿の庭にあつた梅の古木で刻うんだという、渠かれが愛玩あいがんの香合かうごうを取とつて、一い捻ねんして、

「こんなここツちやあ可いかん。」と自みづから窘たしなめるがごとく眩つぶやいて、洋燈ランブを見て、再またび机に向つた時、室まが広いので灯も届とかず、薄暗

いふるぶすま古襖しわぶの外ぶに咳くく声こゑして、

「先生、御勉強ごんげんじやな、」といいながら静かに入つたのは、院の
住職しゆしやく律師りつしん雲うん岳がくである。

学士がくしの前に一いち揖いして、

「お邪魔を。実はまた一石願いっせきがんおうかと思つて、参つたがな、御音
読よみ中ちゆうでござつたで、暫時せんじあれへ控ひかえておりました。何を御覧ごらんなさ
るか、結構けつこうなことじゃ。襖あはせ越こではござるし、途切とぎれ途切とぎれで文章
はよく聞取ききとりませぬが、不思議ふしぎに先生、今夜こんやの貴方あなたの御声ごこゑという
ものは、実に白びやく蓮れんの花はなに露つゆが転まろぶといふのか、こうその溪たに
川かわの水みづへ月つきが、映うつると申まをそうか、いかにも譬たとえようのない、清
い、澄すみんだ、冴さえ々ざいした、そういたして何か聞きいている者ものまでが、

引入れられますよ、心細いなさけ情ないといったように、自然とうら悲しくなりましたが、一体お読みなされたのは。」と思入った風情である。

梓は卜胸を突いた様子で、

「希代なことがあるんですよ、お上しょうにん人、読んでいましたのは

御存じの雨月なんです、私もなぜか自分の声に聞き惚とれるほど、

時々ぞつぞつとしちやあその度に美しい冷い水をひとしずく一雫ずつ飲

むようで、唾つが涼しいんです。近頃はこういうものか、ものを言

うにさえ、唾がねばって、舌がぬめぬめして心地の悪さといった

らなかつたんですが、まあ、体が半分水になつて、それが解けて

行くゆよう、月の雫で洗ったようです。それでいて爽さわやかな可い心

持かと思うと、そうじゃない、ここン処が。」といいかけて、梓はうら寒げに、冷たい衣きぬの上から胸おきを圧えた、人にも逢わず引ひきこ籠もって、二月余あまり、色はますます白く、目はますます涼しく、唇の色はいやが上に赤く、髪はやや延びたが、艶つやを増して、品好よくやせ瘦やせぎすなむなさわぎ倂むなさわぎは、見るともの凄すごいほどである。

「胸むなさわぎ騒むなさわぎツていうんでしよう。」

鶯

「痛いのかと思うとそうでもなしに、むず痒い、頼ない、もので
おさ 圧えつけると動気どうきが跳おどる様ようで切なくツて可いけません。熟じつとしてい
れば倒れそうになるんですもの、それを紛らそうといつになく、
声を出して読み出したんですが、自分で凄すごくなるように、仰おっしや有
れば成程い良い声というんでしようか。」

「なかなか、幽冥ゆうめいに通じて、餓鬼畜生まで耳を傾けて微妙の音
楽を聞くという音調だ、妙なことがあるものでございませぬ、そ
して、やはりお心持は。」

「憑物つきものでも放れて行ったように思うんですが、こりや何なんで
しよう、いずれその事に就いてでしようよ、」と微かすかに笑えみを含ん

で、神月は可愧はずかしげに上人が白ひげ鬚なつめある棗おもてのごとき面を見た。

「どうしても思い切れなかつたんです、実は……。」

ここに梓まちびとが待つじうら人、辻占、畳算、夢うらないの占などいう迷信さかんの盛あらかじな人の中に生れもし育ちもし、且つ教えられもしたことを予め断つておかねばならぬ。

はじめ蝶吉と歌枕あいびきで逢あ曳ひの重なる時分、神月は玉司子爵の婿君であつたから、一いってき擲千金はその難かたしとせざる処、蝶吉が身を苦界から救うのはあえて困難な事ではなかつた。

もつとも他ひとと違い、神月は、己おのれが既往の経歴に徴して、花街にあるものの、かえつて、実があつて、深切で、情を解して、殊に一種にんきよう任にんきよう侠やくの氣を帯びていることを知つてはいたが、さすがに

清い、美しい体のものだとは思わない。そのほとんど、たなそこ掌にも、
 額にも、わるあせ悪汗一ツ搔いたことのない、ほくろ黒子も擦傷の痕もない、
 玉のごとき身を投じて、これが歌枕の一室に、蝶吉とふすま衾を同じゆ
 うする時は、さばかり愛憐の情は燃えながら、火中一条の冷竜あ
 って身を守り、あだようちよう婀娜窈窕たる佳人にも梓の肌をけが汚さしめず、幾
 分の間隙を枕の間に置いたのであるが、あるあさ一朝、蝶吉はふツと目
 を覚して、うつつ現の梓を揺起して、びっくり吃驚したようにあたりを見なが
 ら、夢に、あやめ菖蒲の花を三本、つぼみ蒼なるを手に提げて、暗い処に立っ
 てるあかると、明くなつて、太陽が射した。黄金のようなその光線ひかりを浴
 びると、見る見る三輪ともぱつと咲いた、なぜでしょう、といつ
 て、あどけ仇気なく聞かれた。梓はあたかも悪夢に襲われて、幻の苦患くげん

を嘗^なめていた、冷汗もまだ止^とまらなかつたくらいの処へ、この夢を話されて、面^{おもて}を赤うするまで心に恥じた、あわれ泥中のこの白き蓮^{はちす}に比して、我が心かえつて汚^{けが}れたりと、学士はしみじみ蝶吉の清い心を知つた。

その時と、いま一度は、蝶吉がしかるべき軍人の一座の客に呼ばれたが、言うことが癩^{しやく}に障つた上に、酔つて懐の玉を探ろうとしたので、癩^{かんしやく}癩^{やく}を起してその横^{よこ}顔^{つら}を平手で撲^{なぐ}ると、虎^{とらひ}髯^げを逆^{さかさ}にして張^{ちやうひ}飛^ひのように腹を立て、ひいひい泣入る横腹を蹴^けつけたばかりでは合点せず、その日の主人役が客に済^{すま}ずとあつて、死^{しん}だものようになってるのを引起し、二人両手を取つて、小刀^{ナイフ}で前髪を切つて、座敷をつツ立つた。居合した朋輩も、女中

も、駟かけあが上つた若若い者も、顫ふるえるばかりで、取とりおさえ手もなかつたといつて、梓ふるに顫ふる着いて口く惜やしがつた時には、耐たまらずその場から車に乗せて、これをわが園そのへ移し植えようと思つたのである。

四十三

もとよりその時には限らない、女は迷惑を懸けようとはしないで、一げ生い芸い妓しをしているから、変らず見棄てないでさえくれれば可いというのだけれども、いうがごとく、聞くがごとく、はたそれ見るがごとき氣性の女、梓は心の動くごとに勤つめを落ひ籍かそうと思わぬことはなかつたが、渠かれが感情の上に、先天的一種の迷信を

持つてるといふはこのこと。

一体、天神様の境内で、恩を謝す心を決して以来、その機会がなかつた処、翌年一月、伊予紋で、大学出の人の新年会があつた。一座の中に蝶吉が居た。また一座の中に、下宿の二階に住んで六畳の半ばを蔽う白熊の毛皮を敷いて、ぞろりと着流して坐りながら、下谷の地を操縦する、神機軍師朱武あつて、疾より秘計を囲らし、兵を伏せて置いたれば、酒半ばにして哄と矢叫の声を立てて、突然梓の黒斜子に五ツ紋の羽織を奪つて、これを蝶吉の肩に被せた。嬉しい！と手を通して出の三枚襲の上へ羽織ると齊しく引緊めて、裾を引いたまますつと出て座敷を消える。と、色男梓君のために、健康を祝してビールの満を引くもの数を

しらず。梓は丸腰の着流し、あたかもお館やかたの法度はつとを犯して裏庭か
 ら御台みだいのお情なさけで落ちて行くゆように、腕車くるまで歌枕うたまくらに送られたが、後
 を知らず、顔色も悪く未明に起きると、帯を取つて、小取廻ことりまわしに
 尖さきを渡して、本式に畳んで置いた袴はかまの腰板を取つてあてがい、着
 たまま枕まくら頭もとに坐つて介抱かいぼうしていた蝶吉かたきちが件の羽織うづりを惜おしそうに
 脱いで被せた。人肌のぬくみも去らず、身に染みた移うつり香かをその
 まま、梓あざは邸やしきに帰つて、ずつと通ると、居間の中には女交まじりにわ
 やわや人声。明けて入るのを、小間使こまづかいが、あれといつて、手を
 突く間もなく、一人が背後うしろからぴつたり閉めた。雨戸は半はん開ひらき
 のまま、朝がけの軍いくさに狼狽うろたえたような形。払はたきを持つやら、箒ほうきやら、
 団扇うちわを翳かざしているものやら、どこに透すきがあつて立ち込んだか、鶯うぐいす

がお居間の中に、あれあれという。鴨居かもいから飛んで、到来ものを飾った雪の積ったような満開の梅の盆栽の枝に留とまつたのを、逃がすなど箒を突出すから、梓は引留めながら件の羽織を脱いで、はらりと投げたのが、中に鶯を包んで落ちた。

手を入れて労り取つて、二十四の梓は嬉しそうに、縁側を伝つて夫人童子の寢室ねやに入つて、寢台ねだいの枕頭おっつに押着けて、呼起して、黄鳥うぐいすを手柄そうに見せると、冷やかに一目見たばかり。

（私はまだ起きる時間ではございません。）と背後うしろも向かず自若として目を瞑ねむつた。その時も梓は顔の色を変えたのであるが、争うこともせず。

（失礼、）といつてずつと出て、廊下に立ちながら籠かごを命じ、持

つて来る間を、手では、と懐に入れながら、見霽みはらしの湯島の空を眺めている内、いかなる名鳥か嚶おうおう々として、三度たび、梓の胸に鳴いたのである。

が、籠が来て懐から出そうとすると、羽ばたきもしないので、早や馴なれたかと思うと、あわれ、翼をちぢめて目を落していたのである。蔣まきえ絵の鳥籠に、件くだんの盆栽の梅を添えて、わざわざ葬つかいらせに使つかいを出した。以来心に懸かかつて、蝶吉を落籍ひかそうと思うたびに、さることはあらしと知りながら、幼い時からの感情で、羽織おの同お一んのなが兆をなして、恐らく、我が手に彼を救うてこれを掌中の玉とせんか、時を措おかず碎けるのである。日もあらず煩いでもするるのであろう、むしろ、生命いのちが長くあるまい、と思う念に制せら

れて、その寿を欲するのために、常に躊躇ちゆうちよしていたのであつたが。

四十四

「……一旦縁を切つてしまつた上では、私が心持にも、また世間の義理にも、疚やましいことはないんですから、それが未練といふんでしよう。そのうち玉司へ行つて、表おもてむき向縁を切りかたがた、あの男は手切を取ると言われても構わない。芸妓げいしやを落籍ひかせると隠さずについて、金子を取つて、それで、勿論二度とかかりあいはしない意つもりじやありませんがね、苦界だけは救つて素人にしてやろ

うと、お上人、可愧はずかしいんですが言います。実はそれを心たの楽しみにして、幾分かまだまるつきり離れてしまわないような気で、当分逢わなただけだというような心持でおったんです。

先刻さつき私を尋ねて来た、品のいい老女があつたでしょう。彼は玉司に昔から勤めている取とりしまりで、何十年にも奥からは出た事がない、まだ鉄道はどんなものだか知らない女で、童子の乳母なんです。実はその用で参ったんで、私にまた帰れていいいます。それとはあんな御気性だから、怪けが我がにも仰おっしや有りはしないけれども、何をいつたつて、初めて男を知ったお姫様だ。貴方あなたが内を出てからは、鬱うつうつ々として人にもお逢いなさらない。

医者は神経衰弱だというそうですが、不眠性に罹かかつて、三日も

四日も、七日ばかり一目もお寝みなさらない事がある。悩みがなぬか一やすととおり
 通とじやない。この間もうとうとしかけた処へ、縁側を通つた
 腰元があしおと登音をたて立て、それがために目が覚めたといつて腹を立つ
 て、小刀をナイフ投付けて、もうちつとで腰元の胸を突こうとしました。
 この頃じや、まるで一室ひとまの外へも出て来ないような始末。見か
 けはどんなでもよくよく心を知ってるのは、乳母だから、私に帰
 れ。

承れば大分御謹慎で、すっかりお品行みもちも治つたそうだつて、そ
 ういうことでございました。

随分片意地な老女が、我がを折っていましたから嘘じやありません
 すまい。

成程それではあんな夫人ひとでも私をそれまでに思つてくれるのが解わかりましたが、こうなつた上のこと。

謹慎をしているのは、あえて辛抱を見せて、玉司の家に帰りたいためではないから、断然、これツきりだと思つてくれ、私の引ひ籠きこもつて身を責めているのは、ただ先祖に対して済まないと思うからだ。

ときつぱりいつて帰しましたよ。」

「ふう、」と上人は頷うなずいて、じつと考え、

「いや、段々お心が静まつて来て、好よい御返事をなされた、結構じゃ。」といいかけて、梓のもの寂しげなる顔を見て、

「それでさつぱりとなされたかな。」

「ええ、さっぱりしたそのせいだろうと思うんです。まだ、金の蔓つるがあつて、一式のことに落籍ひかして素人にしてやろうと、内々思つてました内は、何かしら心の底あつたまりに温があつたのを、断然つかい、使を歸した上、夫人の心も知れて見れば、いかに棄身すてみになつた処で、無心などいえたものじゃあない。そうすりやお蝶の方も、もうあれツきり、ふツつり切れた、私はこう孤はなれしま島に独り残されたよ
うで心細い、胸むなさわぎ騒さわのするのはそのためはに違ちがいないんです、お可はずかし愧かいね、」といった清らかなる学士の笑顔はうら寂しい。

「ははあ、いや、お若い中うちまた余り悟り澄すまさないのも宜よろしかろう。たんと迷わつしやるも面白い。」とこの人こそ悟り切つたらしいことをいって、呵からから々と笑つて、行きがけに大音で、「誰ぞ先生

に茶を上げい。」

梓はまた机に向つたが、木の角では、心の跳おどるのが押え切れず、胸騒ふせがする、気が鬱ふさぐ、もう引入れられそうこたで耐えられなくなつて、香こうの薫かにおり、染みだ不断着こたをそのまま、かかる時、梓が行ゆくのは必ず湯島。

白木の箱

四十五

「富ちゃん、ちよいと、富ちゃん、私の人形を知らなくツて、」
 あたふた狼狽うろたえたようなものの氣勢けはい、癩癩かんしやくまじ交りに呼んだのは蝶吉である。

「一件だ、」と、これを聞いてかねて心得たものごとく、源次かたわらは傍に目配せした。

「来ましたね。」と低声こごえでいつて、訳もなく天窗あたまを叩いて竦すくんだが、円輔は、えへん！
 声こわづくろい 繕つくろいをして二階に向い、

「お蝶さん、何ですか、人形。人形どころかい、そこどころじゃあない、大変なことがありますぜ、ちよいと大したこツた、豪えらいこツたよ。」

「何、」と切つて棄てたような、つつけんどんなもの言いである。

「まあさ、ちよいとおいでなさいていこつた、こつたの性しやうなら下まで来いだよ。」

「富ちちゃん、富ちちゃんてば。」

蝶吉は取合ずに、雛おしやく妓ばかり呼立てる。

「まあおいでなさいつていうのに、何ですぜ、ちよいと、大変なこつた、お蝶さん、神月の旦那から、」

「ええ、」

「それ見ねえ、」と源次がちよいと突いて、にやりと笑うと、円輔はおおのりじ大乘地で、

「旦那から、もし小包郵便が来たんですぜ。」

「ええ。」

「神月さんからお届けものだ。」と源次も傍そばから口を添える。

「知りませんよ。」と邪険には言つたけれども、そのうち自らおのやむらぎ和のある、音色ねいろを下で聞ききすま澄して、

「御存じの筈はずですが、神月さんといやあお前さん、」

「可いいいよ。」

「宜よろしくばお止やめになさいまし。」と大いに澄し、顔を見合せて黙だんまりとなつた。

「富ちゃん、」

「そら、また富ちゃんだ。」といつて円輔は、敷居の処まで来て立っている雛妓を見て屹きつと目で知らせた。

「私わたいは知らないの。」

しばらくして、声も優しく、

「いいえ、小包さあ、」

「本当だつてば、何を疑るんだな。」と源次は大真面目でいる。

「嘘ばツかり、」といいながら、ちよいとためらつた様子であったが、階子段はしごだんがトンと鳴つた。

下から仰山に遮つて、

「ちよいとお待ちなさい、お蝶さん、請取うけとりがいりませぬ、いらつしやるなら、どうぞ、御懐中物を御持参で、」

「宜しい、」と男らしく派手に爽さわやかにいった。これを機掛きっかけに、蝶吉は人形と添寝をして少し取乱したまま、しどけなく、乱調子に三階から下りて来て、突然いきなり、

「どこにさ、」と嬰兒あかんぼの強請ねだるようにいいながら、人前を澄した顔。

「気が疾はやいな、どうも、師匠出してやりたまえ。」

「まずお受取を頂戴いたしたいような訳で。」

「すツかり負けて来たんですからたんとはなくツてよ。」

「豪こもんちりめんい！」といいさま、小紋縮緬おなじで裏が緞子どんす、同く薄ツペらな

羽織ひらをひらりと撥はねて、お納戸地の帯にぐいとさした扇子を抜いて、

とんと置くと、ずっと寄つて、紙幣を請取り、

「何にいたしましたしような。」

源次は取片附けて、

「まあ、師匠。」

「じゃあちよいと升どん。」

勝手から、

「御馳走様ごちそうさまですね。」

四十六

「さてはや、何でげすえ御到来物は。」と円輔ランブは洋燈の方へ顔を
 突出し、源次は柱に天窗あたまを着けて片陰で仰向あおむいた、この兩人、胴ど
 中うなかを入違うないに、長火鉢の前で形エツキスがX。

「どうもお相伴ありがとを難有あうございませよ。」と向むへ坐つたのは、
 遣手やりてが老いたりという面構つらがまえ、目肉めじしが落ちたのに美しく齒を染

めている、胡麻塩天窓、これが秘薬の服方、煎法、墮胎した
 後始末、体の養生まで一切取計った、口の臭い、お倉という
 婆である。

蝶吉は、確に小包を請取ったので、かくとは思ひ懸けず、慎み
 ながら、若いから、今も今で、かねていいつけられて窘んだ、花
 札を引いて、気の衰えるまで負けて帰ったので、済まなさも済ま
 ないし、嬉しさも嬉しければ、包んでも色に出る極の悪さ。震え
 る手で明い処へ持出して、顔を見られまいと、傍目も触らず、血
 の上った耳朶を赧うして、可愛らしく畏つて、右見左見、
 「おやおや、大倭家内松山峰子様行と書いてあるねえ。」
 「峰子様、よッ。」と懸声をするは円輔なり。

「可くツてよ、」と可愧はずかしそうに、打返してまた裏を見た。

「神月より、……おや、平時いっもの字と違つてやしなくツて？……何だか手が違つてるようだねえ。」

あえて疑うというではないが、まさかと思う心から人にも、確めてもらいたいので、わざと不審いぶかしげに眩つぶやいた。

「わざツと手を替えてお書きなさいましたあね、そりや、お前さん。」と婆々は極めて鹿爪しかつめらしい。

「そうねえ、何だか包が大きいわねえ、何だしら。」

玉手箱という形で両手に据えながら目を瞑ねむる。

「何でげしよう。」

「何だか、」

「そうさね。」

「一番あてツこで、丁と出たらまた頂戴は、どうでげすえ。」

源次は鷹揚に、

「下司張るな下司張るな。」

「どうせ詰らないものよ。」と蝶吉は笑いたそうにして押耐える。

円輔は例に因つて、

「よッ！」

「沢山おひやかして下さいな。」と怒つたのでも何でもない、いそいそ膝の上へ抱下して斜にした。

蝶吉は簪を抜いて、そつと持つて、

「邪険に封をしてさ。」といいいい、名工が苦心の眼で、瞞めて、簪の尖で、封じ目を切つて解く。

上包はくるくると開いて、やまと新聞の一の面が颯と膝の上に広がった。中は、中は、手文庫ばかりの白木の箱。

「さあさあ御覧じろ、封が解るに従うて、お蝶さんの、あの顔が段々弛んで来る処を、」

「どういう訳だか、不思議なもんさね、」と源次郎は憎体な。
「私沢山だ。」

「何もお前さんそんなにつんとすることはないじゃありませんか、頬を膨らしてさ。」

「一生懸命でおいで遊ばす、さあ、耐らない。ほれ、」

「それ笑つた。」

蝶吉は莞爾にっこりして、

「御免なさい、」というかと思つと、引攪ひっさらうように小包を取つて、裳もすそを蹴返すと二階へ、ふい。

驚いたのは円輔である。ぐんにやりとなつて、

「豪えらい！」

四十七

「堪忍なさいな、私わたいは見向いても下さらないんだと思つて、自暴やけよ、お花札はななんか引いてさ、堪忍して下さいな、可よくツて。おま

え様さんの深切を無にしたようだけれど、だってしようがないんだもの。これからきつと大人しくしますから。いつけた通とおりにしてい
ると思つていらつしやるんだよ。悪かつたわねえ。それでも開け
ても可くツて。嬉しいなあ、」と胸を抱だきしめて身を顫ふるわした。こ
の音信たよりがあつたので、許されたもののように思われて、蝶吉は二
階あがに上ると、まずその神月の写真を懐に抱いたのであつた。
それでも箱の中が気に懸かかつて、そわそわして手も震い、動悸どうきの
躍るのを忘れるばかり、写真で圧おさえて、一生懸命になつて蓋ふたを開
けた。

箱の中には紙にも包まず裸の人形が入っている。

ふつと見て少し色を変えて、

「おやおや、おかしいねえ、あてツこすりに寄越したのかしら、私わたいをこんなにしておいて、まだそんなことをする方じゃあない、」
 とこの時気が付いたのは、自分の人形のことである。

蝶吉は夢のような心持がして、気味悪そうに、灯ともしびの暗い、森しんとして、片附いた美しい二階の座敷みまわを、したが、そうだ、小包が神月からというのに顛倒てんどうして忘れていた、先刻さつきを思出すと、悚ぞつとして、ばたりと箱を落して立ち、何を憚はばかるともなく、浮足うきあしで、密そつと寄つて、蒲団ふとんを上げて見ると何にもない。思切つて、白い手を冷い小さな閨ねやの中うちに差入れると、丹精ひつをして着せておく、筒袖まるの着物に襦袢じゆばん、縮緬ちりめんの書生帯ひつまで引くるめて、円まるげてあつた。
 蝶吉は、呼吸いきを詰めて、唾つばを呑み、座に直つて、引寄せて、熟じつと

見て蒼あおくなつた。涙をはらはらと落して、震ふるい着いて、

「坊や、」とばかり、あわれな裸はだかみ身を抱え上げようとして、そ

の乳のあたりを手に取ると、首が抜けて、手足がばらばら。胴どうな

中かの丸いものばかり蝶吉の手に残つたので、

「厭いや！」と声を上げざまに、蛇を掴つかんだと思つて、どんと投げる

と、空を切つて、姿見に映つて落ちた。

「あれえ。」

下階したでは哄どつと笑う声、円輔は屹きつと見得をして、

「今いまのは確たしかに、」

「叱しつ！」と押えて源次はしてやったという顔色かおつき。

「雲井の印紙を引剥ひっぺがして、張り付けて、筆で消印を押したお手

際なんざあ、」

「どんなもんだい。」

「いや、御馳走様でございますよ。」

「口惜くやしい！」と泣く声が細く耳を貫いて響いたが。

下じめの端を両手できりきりとメ《し》めながら、蹠よろめ跟いいて二

階を下りて来た、蝶吉の血相は変っている。

顔も蒼白く、目が逆釣さかづり、口許くちもとも上に反つたように齒を嚙かん

で、驚いて見る下地ツ子の小さな手を碎けよと掴んでぐツと引着けた。

「あれ、姐ねえさん。」

「さあ、言つとくれ、言つとくれ、承知しなくツてよ、私わたいの、私

の人形をあんなにしたなあ誰だ。いいえ、知らないツたつて不可
いの、あんなにお前さんにも頼んでおくものを、……」と力を籠
めておさえるようにいったが、ぶるぶる震える、額には筋が通つ
た。

「手も足もばらばらよ、酷いひどツたら、酷いことよ。さあ、誰だか、
いっておしまい、いえ、聞かしておくれ。蔭になり日向ひなたになり、
しよっちゆう庇かばつてやる姐さんだ、お聞かせなね、ええ！ 畜生
言わないかい。」

「痛い、痛い、姐さん。」とべそを搔かいてたのがわつと泣出した。

灰神楽

四十八

「ま、ま、お前さん何でございます、手荒なことを。」と婆は居ばば合腰あしに伸上のびあつて、袂たもとを取とつて分けようとするのを、身み悶もだえして振ふ払い、振向ふりむいて屹きつと見て、

「お婆ばあさん、お前まへにも私わたくしは怨うらみがあつてよ、可いい加減かげんなことをいつて誑だましてさ、お肚なかが痛いたむか擦こすろうなんぞツて言いつておくれだから、深切しんせつな人ひとだと思おもつたわ、悔くしいじゃあないかね。畜生ちくせい、放はなせ、何をなにするのよう。」

「おや、こわ恐い、恐いこツた。へん、」と太ふてぶて々しい。血ちまなこ眼でも
 う武者振むしやぶりつき附そうだから、飽あつけ気けに取られていた円輔が割つて入つ
 た。

「さてはや、」

「ええ、手前達の手を触る体じやあないんだい、御亭主が着いて
 るよ、野のだいこ幫間め、」と平手で横顔をぴたりと当てる。

天窓あたまを抱えて、

「豪えらい、」と吃びっくり驚。

「亭主持すさまが凄すさまじいや、向むこうから切られた癖に、何だ、取揚婆のさか
 さまめ、」まさかには思おもい懸かげず、いやがらせをやつて、
 翩なぶつて奢おごらせた上、笑わらい着けて、下駄はらいせの肚はら癒いせをして、それから、

仲直りをして、ちよいと悪党な処を見せて、そこらで思い着かれようという際限のない大慾張おおよくばり、源次は源次だけの考かんがえで、既に今夜印半纏しるしばんてんで、いなつて反身そりみの始末であつたが、悪戯わるさも、人形の手足をもいでおいたのに極きわまつて、蝶吉の血相の容易でなく、尋常ただでは納りおさまりそうもない光景を見て、居合おそれすは恐と、立際たちぎわの悪にくて体口いぐち、

「ざまあ見やがれ、」とふてを吐ついて、忘れずにたばこいれ 入を取つて差し、生なまつちろ白おおもたい足を大跨おおもたにふいと立つて出ようとする。

「待ちやあがれ。」

「ええ、」

「悪戯いたずらをしたなあ、源の野郎、手前てめえだな。」

「いいえ、私だ。」とすつきりいって、ずつと入ったのは大和屋の姐ねえさんで、蔦つた吉きちという中年増ちゆうどしま。腕も器量すごも凄いのが、唐とうぎ棧せんずくめのいなせな形なりで、暴風雨あらしに屋根を取られたような人立ひとたちのする我家の帳場を、一ひと渡わたりみまわしながら、悠々として、長火鉢くろびろうどの向側、これがその座に敷いてある、黒天鵝絨くろびろうどの大座蒲団おほいざぼたんにきちんと坐まつて、「寒い。」と肩を一つ揺ゆつておいて、

「皆静みなしずかにしておくれ、お蝶さんお前もおすわり。」

「何ですツて、」と蝶吉は目を据えて立つたまま、主婦あるじが方かたに向直まつて、

「悪戯あくごをしたなあ、お前さん、」と屹きつという。

「あい、私さ、」

「何、」

「突立つ立たつて、何だ。」

「坐まつたらどうおしだい。」

「おやおや、この女こは、目めが上あつてるよ、水でもぶツかけておやんなね。」

「まあ、姐あねさん、」とばかりで円輔えんすけは遣瀬やるせがない。

「お蝶おちょう私は主人しゅじんだよ。」

「は、私わたくしお前まへさんの抱かか妓かえじゃありません、誰たれが、そんな水臭みずくさい、分わらない奴やつに抱やえられるもんか。人ひとが知しらないと思おもつてさ、薬くすりを飲のませてさ、そのせいで、私わたくし逢あえないんじやありませんか、命いのちもいらぬ人ひとよ。あんまり思おも遣やりがない、何なにが氣きに入いらないで、

人形を壊したのよ、よ。お前さんは悪いことを、ようく知ってて
わたい私に教えてさ、無理にあんなことをさせておいて、まだ足りなく
 ツて。畜生！ 義理知らず、お前さんの出では田舎じゃあないか、
わたい私はね、仲之町で育ったんです。「と蝶吉は急せき上げて言うこと
 もしどろである。

四十九

「黙れ、黙れ、黙れ、ええ黙らないかい。」といいさま持ってた
ながぎせる長煙管で蝶吉の肩をぴしと打った。

「畜生！」

「生意気な、文句をいうなら借金を突いて懸るこつた、分が何だ
い、憚はばかながら大金が懸かかつてますよ。そうさ、また仲之町でお育
ち遊あそばしたあなただから、分外なお金子かねを貸した訳さ。しッ越こしも
ない癖くせに、情人いろなんぞ拵こしらえて、何だい、孕はらむなんて不景気な、そ
んな体は難産きまと極きまつてるから、血だらけになつて死なないうように
とお慈悲おほろで墮おろしてやつたんだ。商売にも障さわります、こつちや何も
慰なぐさみに置くお前まへじゃあない、お姫様も可いい加減かへんにしておくが可いいや、
狂きやう気きい。あさつ朝から晩まで人形いじくりをし通たまされて耐たまるもんか、外ほか
の妓こにも障さわるんです、五人六人と雑魚ざご寝ねをする二階ににあんなもの
出だ放はなしにしておかれちやあ邪魔じまにもなるね。面つらも生ちろツ白しろいし、
芸も出来て、ちつたあ売れるからと大目おほめに見て、我まをさして

おきやあ附け上つて、何だと、畜生。もう一度いつて見ろ、言わなきやあ言わしてやろうか、」

と乗上つて火鉢越に、またその頸えりのあたりを強く打ぶつたのである。

「神月さん！」と蝶吉は半狂乱で悲鳴を上げる。

「まあさ、まあさ、姉さん。」と円輔は手持てもちぶさた不沙汰しきりなのを頬もに揉む。

「一体口が過ぎるんですよ。」と婆はねツつり。

「いいえ、たまにやこんな目に逢わせておかないとね、いい気になつてつけ上りまさあね。神月さんがどうした、向うから突出された癖に何だい、器量の悪さツたらありやしない、呼べるなら呼

んで見るが可いや。」

「ええ、呼ばなくツて、」と泣々なきなきいいながら、立とうとするのを、婆がむずと掴つかまえた。

「お前さんは。」

蝶吉は弱々となつて崩折くずおれて、

「悔しい、悔しい、悔しい、悔しい、皆で私を、私をどうするの

よ。どうせ死ぬんだから、さあ、殺しておしまいなさいなね、さ

あ、さあ、」と小供が捏々だだをいうごとく、横よこずわり坐まになつて、顔

も体も水から上つたようにびツしより汗になりながら、投遣なげやりに

突つかかる。

「殺して耐たまるもんか、大枚たいまいのお金子かねだあね、なあお婆さん。お

ほほほほほ。」

「さようでございますとも、ははははは、」と笑いつけてあえて
 不関焉。かんせず

真蒼まつさおになり、髪も乱れて、泣吃逆なきじやくりをしいしい、

「殺さなくツたつて可いいのよ、可いいのよ、厭いやなら止よせ、私わたいどうせ
 死ぬんだから。そして、あの皆神月みんなさんに言い付けてやるから覚え
 ているが可いい。私わたい誰たも構かつちやあくれないんだもの、世間にやあ、
 鬼おにばツかり。」とはや血が狂くるつたか舌しつも纏もれて他愛たあいがない。

「ええ、性根しやうこんをつけないかい！」と、力ちからなく己おのれを捕とえた敵かいなの腕うで、
 婆ばあの膝ひざによりかかつて肩かたで息いきを吐ついている、胸むねの処ところを、また一つ
 煙管たばこで撲なぐつた。

途端なに糸切歯をきりりと鳴ならして、脱兔だつとのごとく、火鉢の鉄瓶を突つつかえ覆すすと、凄すさまじい音がして※と立たつた灰神楽、灯も暗く、あツ

という間に、蝶吉の姿はひらひらとして見えなくなる。
 「待て、」と縫すがつて戸口で押えたのは源次であつた。

物をも言わず、据すわつた瞳で、じつと見るや、両手に持もつた駒下駄たすきを襷たすきがけに振ふつたので、片手は源次が横顔を打うつて退のぞけ、片手は磨すり硝子の戸を一枚微塵みじんに碎くだいた、蝶吉は翻ひらつて出たと思おもうと、糸を曳ひくように颯さつと駈かける。

五十

「こりや、待て。」

学士は胸むなさわぎ騒さわがして、瑞林寺のその寓居ぐうきよに胸おさを圧おさえて坐するに忍しのびず、常にさる時は行ゆいて時を消すのが例であつた湯島から、谷中に帰る途みちの暗くらがりで、唐突だしぬけに手を捕とらえたのは一名の年若わかき警官である。

梓は気も心も沈しんんでいたから少しも騒さわがず、もとより驚おどく仔細しさいはない。静しずかに顧かみて、

「私、」

「どこへ行くか、あツ貴様は。」

言葉も荒く、ものに激おどしているようである。

「谷中の方へ行ゆくんですが、」

「うむ、墓原へでも寝に行くか、嘘を吐け！ き様掬摸じやろう、」とほとんど狂きちがい人に齊ひとしい譎うわごと言を言つたけれども、梓はよく人を見て、この年少巡査があえて我を誣しいんとする念慮のあるのでもなく、また罪人を悪にくむ情が烈はげしいのでもなく、単に職務に熱誠であるため、自ら抑うることの出来ない血気に逸はやるのであることを知つた。

「貴方あなた御心配には及びません。」と微笑ほほえむばかりに涼しく答える。清らかなその面おもてを見ても、可懐なつかしい香こうの薫かおりの身に染みたのに聞いても、品位ある青年であることが分るのであろうに、警官は余り職務に熱心であつた。

「名を言え、番地はどこか。」

「……………」

「こらー！」と驚くべき声で詈り喚く。のしわめ

あえて憚る処はばかはないけれども、名告るは惜しい名であつた。神月よどはいい淀み、

「玉……月、」とばかり言葉が濁る、と聞免ききのさず、

「玉……玉……玉何だ、」と畳みかけて尋問する。

「玉月、あ、秋太郎です。」といったが我にもあらず狼狽あわてたのである。

「家は、」うち

「下宿して、」

「どこだ、何というか、うむ、疾はやく言わんか。」と急せき立てられ

て、トむねをついて猶予ためらつて、悪いことをしたと思つた。

横顔をひとこぶし一 拳、ひし拉げよとは撲りつけて、威丈高になつて、

「来い、」

ほりゆう

蒲柳の公子は生れて以来、かばかりの恥辱を与えられたことをかかつて覚えぬ。夜目にこそ見えね色なを作して、

「君！」

「馬鹿いえ、君たあ何か、」といひざまによこなぐり横 撲はたにはた払く手を、
しつかと取つたが声も震えて、

「名を言おう。」

「何い。」

「神月梓というんだよ。」といひながら手を向うへおしや押遣つたが、

吻と息を吐いて俯向いた。学士はここで名乗った名が太くも汚れたように感じたのである。

警官はこれを聞くと、その偽名を語ったゆえんを詰らうともせず、たちまち声を和らげて、

「神月かね、」

「用があるんですか。」と、憤はまだ消えず冷かに答えた。

「さようか、何にしても交番まで、」といって、巡査はその仔細を語った。

ちようど今しがた、根津の交番で、太く取乱した女が一人掴つたが、神月という人を尋ねるのだとばかりで、取留のないことを言っている。最初その女が路を歩いていて、時背後から一人跟

て来た男があつた、ということを通行人が告げたので、女は身装みなりの可いい上に、容色が抜群であるから、搦摸か、何ぞ悪意あつて尾行したものであろうという鑑定で、女を取調べる旁かたがたその悪漢の手当に巡行を命ぜられたものである。

語りかけて巡査は嘲あざけるがごとく粹を見て、

「ふむ、色狂いろきちがいの亭主だな。」

星

しかり、|| ||色狂気の亭主|| ||これを警官の口から聞くに至つて梓は絶望したのである。

されば冥土よみじを辿たどるような思いで、弥生町やよいちようを過ぎて根津まで行くゆくと、夜更よふけで人立ひとたちはなかつたが、交番の中に、蝶吉は、腕かいを背びらへ捻ねじられたまま、水を張つた手桶ておけにその横顔を押し着けられて、ひいひい泣いていた。

帯を解いて下じめと共に卓子テイブルの上に縮わがねてあつた。この時たまで嗜たしなんで持つていたか、懐中鏡べっこうやら鼈甲べっこうに透すかし彫ぼりの金蔴まきえ絵えの挿櫛さしぐしやら、辺あたりに散ちらばつた懐紙みおぼえの中には、見覚みおぼえのある縹つづれ縷にしき錦きんの紙入しりいも、落交おちまじつて狼藉ろうぜき極まる、蝶吉はあたかも手籠てごめにされ

たもののごとく、三人懸りががで身動きもさせない様子で、一人は柄にん杓ひを取つて天窓あたまから水を浴びせておつた。黒髪も海松みるとなり、胸も裾すそも取乱して乳も露あらわになつて震えている。

梓は齒切はがみをして、衝つと寄つて、その行おこない為なを詰なつたが、これに答えた警官の語ことばは、極めて明瞭に、且つ極めて正当なものであつた。

狂人きちがい力ちからで手に合あわず、取静めようとして引留めれば、主ぬしのある身体からだだ、指を指すなど、あばれ廻まわつて、簪かんざしを抜いて突つこうとする。突かれて手の甲きずつに傷けられたものも一名ある、ようよう掴つかまえてからも危険だから、腕うでは捻ねじ上げておかねばならぬ。且つその住所、姓名、身分の手懸てがかりを知るために、懐中物しらべも検しらべねば

ならず、或^{ある}はいかなる迫害を途上受けたかも計られないから、身内を検するには、着物も脱^ががさなければならぬ、もちろん帯も解かんけりや不可^{いけな}い。逆上^{のぼせ}て夥^{おびただ}多^たく鼻血を出すから、手当をして、今冷^{ひや}している処だといった。学士がここに来た時には、既にその道^ゆを行く女に尾行した男というのが明かに分つていた。

交番の窓に頬杖^つを支いて、様子を見ている一名紋^{もん}着^{つき}を着た目の鋭いのがすなわちそれで、渠^{かれ}は学士^{うらみ}に怨のある書生の身の果^{はて}で、今は府下のある小新聞^{こしんぶん}に探訪員たる紳士であつた。

「やあ、神月。」

これにも答えず、もとより警官には返すべき言^{ことば}もなく、学士は見る目も可憐^{いとおし}さに死んだものようになっていた蝶吉を横ざま

に膝に抱上げた。

「神月だ。」

思わず骨も砕くるばかり、しつかと縫すがつて離れぬのを、賺すかして、帯をしめさせて、胸を搔かきあわ合せてやつて、落散つた駒下駄を穿はかせて、手を引いて交番を出ようとする時、

「そら忘物だ、」といつて投ほうりだ出して呉れたのは、年とし紀二十の自

分の写真、大学の制服で、折おりかばん革鞆を脇挟んだのを受取つて、角

燈の灯とどの達かぬ、暗がりの中に消えてしまった。が、深更の大路

に車の轆きしる音が起つて、都みやこの一端をりんりんとして馳はせ行く響ゆひびき、

山下を抜けて広徳寺前へかかる時、合あいのり乗の泥どろよけ除にその黒髪を

敷くばかり、蝶吉は身を横に、顔あおもむを仰けにした上へ、梓は頬を重

ねていた。その時は二人抱合っていたが、死骸は大川で別々わかれわかれ。

男は顔を両手で隠して固く放さず、女は両手を下メ《したじめ》
で鳩尾みずおちに巻きしめていた。

この死骸を葬る時、疾風一陣土砂を捲いて、天暗く、都の半面
が暗くなつて、矢のごとき驟雨が注いだ。柩は白日暗中を通つた
が、寺に着く頃ころおには、拭うぬぐがごとき蒼空あおぞらとなつた。

墓は、神月梓、松山峰子、と二ツならべて谷中の瑞林寺にある。
弔うものは、梓が生前の三個の信友と、いま一人、忍々しのびしのびに
音信おとずるる玉司子爵夫人竜子であるが、姫は一夜、墓前において、
ゆくりなく三人の学士にあつた時、哀あいを請うものごとく、その
自分がここに詣もつずることは、固く秘密を守つて世にあらわれぬよ

う、名にかけて誓われないといつてひざまず跪いたのである。哲学者は直ちに靈前に合掌してこれを誓い、柳沢は卵塔の背後うしろに肅然としてうなず頷いたが、一人竜田は、柳沢の胸にその紅顔を押当てて落涙しつかぶりつ頭を掉ふつた。星はその時煌きらめいたであろう。いかに、紫か、緑か、さんぜん燦然として。

明治三十二（一八九九）年十一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成³」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第五卷」岩波書店

1940（昭和15）年3月30日

初出：「湯島詣」春陽堂

1899（明治32）年11月23日

※「鮓《すし》」と「鮓《すし》」、「飜」と「翻」の混在は、底本通りです。

※底本の編者による脚注は省略しました。

入力：門田裕志

校正：砂場清隆

2018年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

湯島詣

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>